

# 『言葉集』注釈（二）

穴井 潤  
小林 賢太  
中村 文

「福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要」第二〇号抜刷

2022（令和4）年12月



# 『言葉集』注釈(二)

穴井 潤  
小林 賢太  
中村 文

## 凡例

本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵『言葉集』下(冷泉家時雨亭叢書 第七卷『平安中世私撰集』所収、朝日新聞社、一九九三年)を底本とする翻刻本文を掲げ、それぞれの和歌について、【整理本文】【本文に関する注】【現代語訳】【他出】【詠出機会】【作者】【語釈】【補説】の各項を立て、適宜注を施したものである。歌番号は『新編国歌大観』第十卷所収『言葉集』に従った。今回は雑下部<sup>324</sup>〜<sup>347</sup>番歌を取り上げる。各歌の注釈の末尾に、それぞれの担当者を( )内に示した。担当者は輪読時に報告を行い、三者による議論を踏まえて原稿を執筆した。注釈の内容については、各担当者が責任を負う。

翻刻本文は、改行等をも含めて、できうる限り底本の原態を残すよう努めた。虫損等で判読が困難な文字は□で示し、字体の推定が可能な場合には、□の右傍に「(〇歟)」として示した。ミセケチ記号は「ヒ」に統一した。

【**整定本文**】 詞書・和歌ともそれぞれ一行書きに改め、濁点・句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。判読が困難な箇所で推定が可能な場合には、推定した文字を示した。

【**本文に関する注**】 重書や反転を指示する記号等、翻刻では示しきれない本文上の特徴について記した。

【**現代語訳**】 できる限り本文に忠実な通釈を試みた。言葉を補った場合には( )内に記した。

【**他出**】 『言葉と歌集』所収の和歌が、他の文献(南北朝以前)に見える場合に、これを示した。和歌作品に見える場合は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。それ以外の文献については、それぞれ典拠を示した。

【**詠出機会**】 当該歌が歌合・歌会・定数歌等の和歌行事において詠出されたものである(含推定)場合に、伝存する歌合本文や諸歌集などの資料によって知りうる情報を示し、参考文献を掲げた。

【**作者**】 当該和歌の作者に関して簡略に解説し、参考文献を掲げた。

【**語釈**】 和歌の解釈に必要な語句や、特に注意すべき事項に関する解説を示した。

【**補説**】 和歌の作意や現代語訳には示しがたい含意、集内における配列意識、また、政治社会など時代性との関連や和歌史上における意義等について記した。

なお、古典作品の引用に当たっては、韻文については特に注さない限り、『新編国歌大観』に、散文については、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』(以上、岩波書店)、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。表記等については改変する場合がある。

近江サマカヘツトキ、テヨ（ナル態）  
ミテツカハシケル

源師光

324 人ハミナクルシキウミニシツム（詞態）□□ニ

ヲリウカミヌルアマヲフネカナ

【**整定本文**】

近江サマカヘツトキ、テヨメルミテツカハシケル

源師光

人ハミナクルシキウミニシヅムヨニヲリウカミヌルアマヲフネカナ

【**本文に関する注**】詞書二字・五字目に重書。

【**現代語訳**】

近江が出家して姿を変えたと聞いて詠んだ（歌を）見て（近江に）送った

源師光

（迷妄の中にある）人は誰もが苦しく憂いの多い海に沈む世の中に、折良く浮かび、迷いを脱して悟りへと向かった海人小舟（尼になったあなた）であるよ。

【**他出**】『師光集』一〇五

皇嘉門院近江世をそむきぬとききて申しつかはし侍るなり

人はみなくるしき海にしづむまでのりうかびぬるあま小舟かな

【**作者**】源師光。村上源氏。生没年未詳だが、天承元年（一一三一）頃の生か。小野宮侍従とも称された。法名生

蓮。『千五百番歌合』判者となっていることから建仁三年（一一〇三）までは生存していた。父は大納言師頼、母

は藤原能実女。後に藤原頼長の猶子となる。子に源具親、宮内卿がいる。歌会・歌合を催行し、判者を務めることもあった。また、師光・清輔・公重・頼輔・俊恵・敦頼・顕昭らが参加した『師光百首』を企画した。家集『師光集』は寿永百首家集とされる。師光撰の私撰集として『花月集』『南都集』の名が残るが、ともに散逸。『千載集』以下の勅撰集に二七首入集する。《参考文献》井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』第六章一八「師光」（笠間書院、一九八八年）

【語釈】○近江 ↓325【作者】。皇嘉門院聖子の女房。○サマカヘツトキ、テ 「サマカへ」は出家して剃髪すること。「ツ」は完了。近江の素性は不明であり出家した理由は定かでないが、養和元年（一一八一）十二月五日の皇嘉門院崩御に伴って、洞院・別当・宰相・内侍といった女房が尼になったことが知られる（『玉葉』）。同時期に出家したと考えるのが穏当か。○ヨメルミテツカハシケル 虫損部分を「メル」と推測する。「ヨメルミテツカハシケル」では「近江が姿を変えた」と聞いて詠んだ（歌を）見て」と第三者の歌によって近江の出家を知ったということになり、他出詞書と状況が異なる。当該歌における「歌を詠んだ人物」は判然とせず、詠まれた歌もわからない。あるいは虫損部分にミセケチ記号があつたかとも推測され、そうであれば「ヨミテツカハシケル」という本文になり、他出と近い状況になる。○ヒトハミナ 「ヒト」は世間一般の人々の意。近江の出家が皇嘉門院の崩御に関連するならば、治承・寿永の内乱における世上の荒廃を含意するか。○クルシキウミニシヅムヨニ 『法華経』「如来寿量品」中の「我見諸衆生 没在於苦海」に拠る。「苦海」とは、現世は迷いや苦悩に満ちた世界であることを大海に喩えた表現。早く山上憶良による大伴旅人妻の死を悼む漢詩「愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 従来厭離此穢土 本願託生彼淨刹」（万葉集・卷五・七九七）に用例が見え、また『往生要集』卷上には「当に知るべし、苦海を離れて浄土に往生すべきは、ただ今生のみにあることを」と記される。苦海の訓読語である「苦しき

「海」を詠む早い例には「あみだぶととなふるこゑをかぢにてやくるしきうみをこぎはなるらん」（金葉集・雑下・六四七・俊頼）があり、院政期以降に多く作例が見え、俊頼歌が「楫―海―漕ぎ」と語を連関させて苦海を漕ぎ離れる情景を詠んでいるように、仏教的観念と海辺の景のイメージを重ねて詠む。「シヅムヨ」は苦海に沈むように現世で苦悩することの意。『師光集』は「しづむまで」につくり、「苦海に沈むまで（の間に）」といった歌意になるか。○ヨリウカミヌル 「ヨリ」は折が良いこと、「ウカミ」は「舟が浮かぶ」に加え、「迷いの境遇から解脱し成仏すること」を意味する。折良く浮かぶ海人小舟が、迷いの淵から成仏へ向かっているという歌意になり、タイミング良く救われたことに対する喜びの気持ちも含まれる。「海―海人（小舟）」の縁語、「しづむ―うかみ」の対比によって、出家し尼となった近江のことを苦海に沈む人々の中で浄土へ向かう舟に例える。「世をうみにしづみもはてであまをぶねうかみいでぬときくはまことか」（重家集・三六〇）「宮の内侍よをそむかれぬとききしかばいひつかはしし」も出家した女房に対する歌であり、近しい女房が出家した際に詠む歌の典型表現であったと思しい。重家歌は「海―憂」が掛詞となっており、当該歌も同じく「憂」が掛かっていると解すべきか。なお、「しづむ―うかみ」の対比については「うけがたき人のすがたにうかみいでてこりずやたれも又しづむべき」（聞書集・二〇一）「地獄を見ても」のように、六道での浮沈を意味する用例も残る。他出では「のりうかびぬる」につくり、「法―乗り」の縁語によって、法の力によって解脱へ向かうことを詠む内容になっている。重家が出家した女房に送った「かのきしへゆかざらめやはよをうみにのりそめにけるあまのを船の」（重家集・三九七）にも近似した使用例が見える。○アマヲブネ ↓322【語釈】。「海人―尼」の掛詞によって尼となった近江のことを悟りへ向かう舟に擬える。

【補説】「人―しづむ」「うかむ―海人小舟」を対比することで、出家したことによって苦海である現世から浮かぶ

ことができたと詠む。「苦しき海―尼」は仏教語として関連し、苦しみや悩みに満ちた世界の象徴である苦海と、そこから脱するために剃髪した尼とが対になっており、【語釈】「クルシキウミ：」項に掲げた『往生要集』のように今生において往生を願う近江の姿勢を表現している。当該歌は俗世から離脱したことの喜ばしさを詠んだものだが、その喜びを直接的に表すのではなく、苦海に浮き沈みしてもがく人々、そこに折良く浮かぶ小舟、という視覚的イメージによって一首を形成することで、この世の苦しみから救われる姿を想起させている。

藤原頼長の猶子だった師光と、藤原忠通女である皇嘉門院の女房であった近江は、九条家に仕えるという共通点によって交流が生まれたか。藤原顕憲女や藤原令明女など、頼長の周囲にいる人物の娘が皇嘉門院女房であったことも接点の一つと考えられる。近江の出家が皇嘉門院崩御に伴うものとすれば【語釈】「サマカヘツ：」項、当該歌は出家したことで様々な非常事態が起こる俗世から逃れゆくことを詠んだと考えられよう。（穴井）

返シ

皇嘉門院近江

325

□<sup>(シ)</sup>カ、ルクルシキウミノ人ヲミ<sup>(ナ)</sup>□

ワタサムトオモフアマノツリフネ

【整定本文】

返シ

皇嘉門院近江

シ□カ、ルクルシキウミノ人ヲミナワタサムトオモフアマノツリフネ

【本文に関する注】歌本文一～二字目に虫損あり。一字目は「シ」と推測するが、二字目は判読できない。

【現代語訳】

返し

皇嘉門院近江

〔 〕 かかる苦しく憂いの多い海の中にいる（迷いに満ちた）人を皆（彼岸へ）渡そうと思う、海人（ならぬ尼



である私)の釣船で。

【他出】『師光集』一〇六

かへし

近江

しりしらぬくるしき海の人をみてわたさむとおもふあまの釣舟

○『万代集』一七四五

世をそむきぬとききて、源師光がとひて侍りける返しに 皇嘉門院近江

しるしらずくるしきうみの人をみなわたさむとおもふあまのつりぶね

【作者】 皇嘉門院近江。生没年、出自未詳。皇嘉門院皇子の女房であったこと以外は分らない。当該歌を除くと、「いかなればおほえの山をこえながらしがのうら波おもひかくらん」(続詞花集・恋上「丹波といふ人にもいふときくをとこの、又ふみをおこせければ」五二一)の一首が残るのみである。

【語釈】 ○シ□カ、ル 他出本文も「しりしらぬ」(師光集)、「しるしらず」(万代集)と定まらない。他出はいずれも「知っている人も知らない人も」といった内容を詠んでおり、「あらゆる」といった意味の語が詠まれていたか。○クルシキウミノ人ヲミナワタサムトオモフ ↓<sup>324</sup>【語釈】。師光歌の表現を撰取して、苦海でもがく人々

を彼岸に渡そうと返歌する。「人ヲミナワタサムトオモフ」は、「人をみなわたすちかひのはしばしらたてし心はいつか朽ちせむ」(法門百首・八〇)、「みな人をわたさむとおもふ心こそ極楽へゆくしるべなりけれ」(千載集・釈教・一二五五・永観)のように衆生を導く立場から詠まれる表現である。他出では「人をみて」となっており、「苦しむ人を見たことよって『彼岸に] 渡そう』と思う」という歌意になる。○アマノツリブネ 海人の乗る釣り舟。「わたのはらやせしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟」(古今集・羈旅・四〇七・篁)によつ

て著名な歌語で、平安後期には叙景歌に多く用いられたが、釈教歌にはあまり詠まれていない。「アマヲブネ」と「アマノツリブネ」では表現の焦点がやや異なっている。「アマヲブネ」はそれ自体が尼の比喻となっているのに対して、「アマノツリブネ」は「海人」「舟」に要素が分かれており、「海人（尼≡私）の釣舟」と強調することによって苦海でもがく人々を自らが救う、と贈歌を詠みかえている。

【補説】初句が判読できず、全体の歌意が取れない。「海―渡す―海人（の釣船）」の縁語は、それぞれが「苦海―彼岸へ渡す―尼」という仏教語の言葉の寄せと対応している。「（あなたは）解脱へと向かうのですね」と一人悟りへ向かうように詠みかけてきた師光に対して、近江は内容をずらして、「（師光も含め）苦しむ人を皆（彼岸へ）渡そうと思います」と返す。贈答歌の典型的なやりとりだが、322・323番歌同様、舟で渡すイメージを尼が救うイメージに重ね合わせている。出家した際の返歌の定型表現であったか。

（穴井）

326 大弐重家出家セラレヌト

キ、テヨメル

清輔朝臣

スミノ（メ歌）□ニナルトキク□ソ（カ歌）ナシケレ  
 □ヘルヨ（カ歌）□ミシツ□ノコ（ル歌）□（ロモ歌）□ソ

【整定本文】

大弐重家、出家セラレヌトキ、テヨメル

清輔朝臣

スミゾメニナルトキク□ソカナシケレカヘルヨリミシツルノコロモノ

【本文に関する注】二句「ナルトキク□ソ」の□部は残画がまったくないが、「ク」と「ソ」の間に一字分の空白が存するので、「□」で示した。なお、二句「ク」の左下、および、五句の後ろに筆の跡のような物が見えるが、字であるか否かは不明であるため、表示しなかった。

【現代語訳】

大式重家が出家なさったと聞いて詠んだ

清輔朝臣

(出家して衣が) 墨染めになったと聞くのこそ悲しいことであるよ。(鶴の雛が孵るように) 生まれた時から(成長し昇進するのを) 見て来た、他ならぬあなたの衣(お姿)なのですよ。

【作者】藤原清輔。藤原北家末茂流頭輔男。母は高階能遠女。天仁元年(一一〇八)〜治承元年(一一七七)。七〇歳。皇太后宮(後に太皇太后宮)多子の大進を勤め、承安二年(一一七二)、正四位下に叙される。祖父顕季に始まる歌道家六条藤家を嗣ぐ者として、久寿二年(一一五五)、父顕輔から「人麻呂影」を譲られる。久安五年(一一四九)に叔父家成主催右衛門督家歌合に参じ、翌六年に『久安百首』に加えられたのを始め、平安末期の多くの歌合に列した。永暦元年(一一六〇)、長寛元年(一一六三)、仁安二年(一一六七)には自家に歌合を催し、承安二年(一一七二)には宝莊殿院で「暮春白河尚歯会和歌」を行った。二条天皇内裏歌壇において指導的立場にあったほか、仁安二年経盛家歌合や嘉応二年実国家歌合、承安〜安元年間の兼実家歌合等で判者を勤めた。早く崇徳院に『奥義抄』を進献したのを始め、『和歌一字抄』、『牧笛記』、『袋草紙』、『題林』、『和歌初学抄』等、特に歌学方面の著作も多い。『古今集』、『後撰集』等、和歌典籍の書写校訂にも熱心であった。二条天皇の命により『続詞花集』を編むが、天皇の死により勅撰集とならなかつた。『千載集』以下の勅撰集に九五首入集。家集に『清輔朝臣集』がある。『参考文献』井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』第二章(笠間書院、一九八八年)、川上新一

郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九年）、芦田耕一『六条藤家清輔の研究』（和泉書院、二〇〇四年）

【語釈】○大式重家 藤原重家。清輔の異母弟。↓318【作者】。○出家セラレヌ 「られ」は尊敬。「ぬ」は完了。

安元二年（一一七六）六月一七日出家。「今日大宰大式重家卿出家入道、生年四十九、無殊病患、遂多年之素懷也、可憐々々」（玉葉・同日条）。『重家集』には、出家の際の詠として、公光および頼政との贈答を載せるが（五九八〜六〇一）、この詠は収められない。○スミゾメニナル 「墨染め」は薄墨色に染めた衣。「おもひかぬかたみにそめしすみぞめのころもにさへもわかぬるかな」（後拾遺集・哀傷・五八九・平棟仲）のように、「喪服」を指す場合と、「おもひやれならぬ山にすみ染の袖につゆおく秋のけしきを」（千載集・雑中・一一四八・源通清）のように、「出家者の衣服、法衣」を指す場合とがある。当歌は後者の意で用い、重家の出家を表す。

○キク□ソ 三字目の□は残画なく判読不能だが、三句が「カナシケレ」と已然形であることから、二句には係り結びを作る「こそ」が含まれていたと考えられ、「□」は「コ」と推定しうる。○カヘルヨリミシ 「かへる」は「孵る」の意で、五句「つる」と意味上で連関する。重家が生まれた時からその姿を見ていた、の意。「鶴の子」と「孵る」を取り合わせた作に、「神のます山田の原のつるのこはかへるよりこそ千代はかぞへめ」（順集・二七二「伊勢規子斎内親王の群行ののち、かへるあしたに、斎王の御前にて饗祿等たまふに、男女うたよむにたてまつる」）があり、当歌はこの歌を撰取した可能性がある。なお、「かへる」には「変色する、色があせる」意もあり、「染め―衣」と縁語を形成する。「墨染め」と「かへる」を連関させて用いた作に、「よをそむき草のいほりにすみ染のころもの色はかへるものかは」（千載集・雑中・一一四七・覚俊上人）がある。○ツルノコロモ 他に用例が見えない措辞。「鶴の毛衣」と同意か。「鶴の毛衣」の措辞は、「くものうへにのぼらんまでもみてしかなつるのけごころも年ふとならば」（後拾遺集・賀・四三八・赤染衛門「匡房朝臣うまれてはべりけるにうぶぎぬぬひてつか

はすとてよめる」と用いられるごとく、「産着」転じて「生まれたばかりの赤児」を指し示すと同時に、「成長の後、殿上を許される」「廷臣として昇進する」といったイメージを含み持つ。当歌の「鶴の衣」も、「鶴の毛衣」の持つこれら二つの意味内容を引き継いで、刑部卿や太宰大弑を勤め従三位に至って公卿に列した重家の、廷臣としての栄達を示唆しているよう。なお、「鶴のころも」には「鶴の子」が意識されているのではないか。「鶴の子」は、「おもひやれまだつるのこのおひさをちよもとなづるそでのせばさを」（後拾遺集・賀・四四四・藤三位）のごとく、「鍾愛の対象たる幼子」を表現する例が多く、<sup>326</sup>歌においても、重家を大切に思う清輔の心情の反映を読み取りたい。

【補説】詞書からは独詠歌とも解せるが、出家した重家に贈った歌であろう。「墨染め―かへる―衣」という語の連関は、修辞技巧であるに留まらず、鶴の羽毛に擬えられる真つ白な衣が、色を変じて出家者の墨染めの衣となる有様を映像として喚起し、重家の出家を視覚的に伝えている。生まれた時から見守ってきた二〇歳年少の異母弟の境涯の変化を、清輔がある痛ましい感情でとらえていたことを想像させる。「鶴の衣」には、【語釈】に示した通り、「廷臣としての昇進」の意を汲み取るべきであろう。微官に沈み位階も停滞しがちで、六五歳でやっと正四位下に到り着いた自らと比較して、四三歳で公卿に列した異母弟重家の経歴は、清輔にとって常にアンビバレントな感情の対象であったかと推測される。

（中村）

民部（御歌）□親範ヨヲソ□キテ

大原ニコモリ（キラレ歌）□□タリ

ケル二十月許風（イ歌）□タクミ（ニ歌）

シミテ侍ケル□<sup>〔7歳〕</sup>シタ□<sup>〔6歳〕</sup>モヒ

ヤルモコ□□<sup>〔7歳〕</sup>□□<sup>〔6歳〕</sup>リ□<sup>〔6歳〕</sup>レハイヒ

ツ□ハシケル

平基親

327 ミヤコタニケサハアラシノケハシキニ

オモヒコソヤレオホハラノサト

【整定本文】

民部卿親範、ヨヲソ□キテ大原ニコモリキラレタリケルニ、十月許風イタクミニシミテ侍ケルアシタ□、オモヒヤルモコ□□<sup>〔7歳〕</sup>□□<sup>〔6歳〕</sup>リケレバ、イヒツ□ハシケル

平基親

ミヤコダニケサハアラシノケハシキニオモヒコソヤレオホハラノサト

【現代語訳】

民部卿親範が、出家隠遁して大原に隠棲なさっていたが、十月頃、風がひどく身に沁みて（冷たく）感じられました。また翌朝、（大原に居る父の状況を）推しはかるにつけても気がかりだったので、言い遣った。平基親

（私の居る）都でさえも、今朝は身を安らかにしてられないほど、山から吹き下ろす風が峻烈なので、（お父さんがいらつしやる所はどんなにかひどく吹いているだろうと）遙かに思いを馳せることですよ、大原の里へと。

【作者】平基親。文官平氏親範男。母は高階泰重女。仁平元年（一一五一）生。藏人所雑色を経て、保元三年（一一五八）正月七日、六位藏人に補されるが、同十日に叙爵（後三条天皇女御源基子の給）。出雲・伯耆の守や勘解由次官を歴任。この間、永暦元年（一一六〇）には、父親範の八省行事賞により従五位上、仁安三年（一一六八）

には朝親行幸賞により院司判官代として正五位下に叙された。承安二年(一一七二)、平清盛女徳子の中宮冊立に際しその大進となり、安元元年(一一七五)に五位藏人、治承三年(一一七九)十月には右少弁となるが、同年十一月の清盛によるクーデターで解官された。寿永二年(一一八三)十二月、右少弁に還任、以後累進して、文治五年(一一八八)に左大弁に至った。この間、位階も上昇し、文治五年正月には、父親範の「応保二年造二条内裏行事賞」により正四位下に叙された。翌六年十月二十七日、従三位に叙され、同日兵部卿となる。建永元年(一二〇六)出家。正治二年(一二〇〇)頃、仁和寺守覚法親王のために、官職制度を解説した『官職秘抄』を撰進したという。和歌事績は、当歌および『言葉集』<sup>282</sup>番に平棟範との贈答の二首が残るのみである。

【語釈】○民部卿親範 平親範。作者基親の父。↓<sup>328</sup>【作者】。○ヨヲソ□キテ 「□」部は虫損により判読不能だが、文脈から「ム」が入ると推定される。「世を背く」は出家・隠遁する意。親範の出家は承安四年(一一七四)六月。当贈答はこの年以降の十月に交わされた。○大原ニコモリキラレタリケル 父親範は出家後、大原極楽房に隠棲した。○十月許 寒さが次第に厳しくなる初冬の時節。○アシタ□ 「あした」は翌朝。「□」部は虫損により判読不能だが、文脈から「ニ」と推定される。○オモヒヤル 「思ひやる」は眼前にない人物の身の上に思いを馳せ気遣う意。京に居る基親が、京都北部の山中大原に隠棲する父の状況をおしはかり案じている。○ココ□□□□□  
□リケレバ 虫損により判読不能の文字があるが、文脈から「コ、ロボソカリケレバ」と推定し解釈した。「心細し」はここでは「不安だ、心配だ」の意と解する。○イヒツ□ハシケル 虫損により判読不能の四字目は「カ」と推定される。○ミヤコダニ 「だに」は軽度のを挙げて、より程度の重いものを類推させる。都でさえも山から吹き下ろす風が激しかったのだから、山中の大原ではどれほどひどく吹いただろうかと、父の状況と心境に思いを馳せている。○アラシ 山間を吹く、または山から吹き下ろす荒く激しい風。「あらじ」を掛ける。○ケハシ

キ 「嶮し」は自然の現象が人間を峻拒するかのように猛烈で荒々しいさま。「嵐」が激しく吹いている形容としては、「みねわたるあらしはげしき山ざとにそへてきこゆる滝川の水」（山家集・九三六）のように、「はげし」を用いるのが一般的だが、「けはし」を用いた例も、「はなざかりけはしきみねのあらしかなをしむこずゑをいかにせよとぞ」（実家集二四）のように数少ないながら見出せる。『実家集』では詞書にも、「はなのころ、上西門院みやしろにこもらせたまひたる御ともにて、あらしのけはしきあしたに」の例が見える（四一）。○オホハラノサト歌枕。山城国愛宕郡（現、京都市左京区大原）。比叡山北西の山里として、多くの隠遁者を受け容れる別所となった。大原に隠棲していた寂然が高野山に居る西行と交わした十首贈答の「あはれさはかうやときみもおもひやれ秋くれがたのおほ原のさと」（山家集・一二〇八）等、多くの作例が残る。

【補説】和歌では、「嵐」の語に、「きのふまでかをりし花に雨すぎて今朝はあらしの玉ゆらの色」（拾遺愚草員外・一七）、「おもへどもかひもあらしのはげしさにもろくこぼるる袖の露かな」（拾玉集・四七九三）のように、「あらし」を掛ける場合がある。当歌においても、「身が存在できないと思われるほど激しく吹く嵐」の意として解釈した。

なお、平基親は『言葉集』に入る二首以外には和歌事績が残らない。『言葉集』編者の広言とは、後白河院の周辺で活動した実務官人同士として交流があり、その縁で入集した可能性が考えられる。（中村）

返シ 前民部卿親範

328 ヒトリススムミネノアラシニタクヒケル

□□<sup>（コノ歌）</sup>コト□□ハソマツアハレナル



【整定本文】

返し

前民部卿親範

ヒトリスムミネノアラシニタグヒケルコノコトノハゾマヅアハレナル

【現代語訳】

返し

前民部卿親範

(私が) 独りで心澄まして隠棲しているこの高い山に吹く激しい風に吹き送られるようにして(私の許まで運ばれて) 来た我が子からのこの便りこそ、何よりも、しみじみと胸を打たれて嬉しいことです。

【作者】 平親範。文官平氏範家男。母は藤原清隆女。保延三年(一一三七)生。承久二年(一一二〇)九月二八日没。八四歳。近衛天皇時代の久安元年(一一四五)十一月に、鳥羽院判官代を経て六位藏人となり、同年十二月、後三条天皇女御基子の給により叙爵。伯耆守・勘解由次官を経て、久寿二年(一一五五)、院御給により従五位上。保元二年(一一五七)正月、五位藏人に補された(翌三年の叙従四位下まで勤める)。また、保元二年八月、右少弁に任ぜられ、以後累進して、永暦元年(一一六〇)に左中弁となった。この間、保元三年二月に皇后宮統子内親王の大進、長寛二年(一一六四)に藏人頭となった。永万元年正月、参議となり、承安元年(一一七一)には民部卿を兼ね、正三位に叙されたが、翌承安四年六月五日、病により三八歳で出家。円智と号し、大原極楽房に隠棲した。父範家が伏見に建立した護法寺が退転していたのを再建。さらに、建久六年(一一九五)にこれを出雲路に移し、葛原親王ゆかりの平等寺および平親信が建立した尊重寺を併せて毘沙門堂とした。著作に『相蓮房円智記』がある。『和漢兼作集』に「三月尽日言志」題の摘句が一首入る(三八一)。和歌事績は当歌の他、出家後、大原で隠遁者たちと「閑中歳暮」題で詠んだ一首が『千載集』冬部に入り(四七五)、同じ歌(下句に異同あり)が『粟田口别当入道集』(九八)に「来迎院」での作として録される。《参考文献》平田俊春「百練抄と親範記」(『日本歴史』四〇二、一九八一年十一月)、三宅敏之「円智(平親範)の埋経について」(『古代文化』三八―三、

一九八六年三月)、二階堂充「大原往生極楽院新考―真如房上人と平親範、およびその周辺について―」(『佐々木剛三先生古稀記念論文集 日本美術襍稿』、明德出版社、一九九八年)

【語釈】○ヒトリスム 人里離れた山中で隠棲していることを示す。西行の「ひとりすむかた山かげのともなれやあらしにはるる冬のやまざと」(山家集・五五八)、「ひとりすむいほりに月のさしこずはなにか山べの友にならまし」(山家集・九四八)等の影響があるか。「住む」に「澄む」を掛けて、山中に独居して仏道修行に精進していることを示唆する。○ミネノアラシ 山の頂きから吹き下ろす激しい風。「ひもくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしのおとばかりして」(後拾遺集・雑五・一一四五・源頼実)、「山ざとはよのうきよりもすみわびぬことのほかなる嶺の嵐に」(新古今集・雑中・一六二三・宜秋門院丹後)のように、山居の寂しさや孤愁感の表現に用いた例が多い。○タグヒケル 「たぐふ」は「連れ立つ」意。激しく吹く嵐により詠作主の許に運ばれてきたことを示す。同様の例は、「みむろやまおろすあらしのさびしきにつまよふしかの声たぐふなり」(千載集・秋下・三〇七・二条太皇太后宮肥後)、「あかつきのあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞさく」(千載集・雑中・一一四九・円位)など、平安後期以降に見え、嵐に乗って物音や動物の声が作中人物に届いたことを表現する場合が多い。○コノコトノハ 子である基親が父親範を案じて贈った見舞いの言葉。基親の詠、327番歌を指す。「この」は指示代名詞に「子の」を掛ける。

【補説】四句「子の言の葉」は基親が親範を案じて贈った和歌を指すが、「葉」の語は「嵐にたぐひける」の措辞と結びついて、激しい嵐に吹き送られた軽き一葉のように、消息が親範の許へと届いたことを映像として表現する。一方、激しく吹いた嵐に親の身の上を心配した基親が消息を贈ったという実際の事情に即して解するならば、「嵐にたぐひける」以下の措辞は、「嵐が吹いたという事態に惹起されたように子の消息が私の許に届いた」ことを

表現する。詠歌の背景をなす状況と、語の連関が形成する映像とが、巧みに結びついた一首となっている。親範は実務官僚の家柄に生まれ、自身も有能な実務官として活動し、また、王家から重用された人物と考えられ、和歌活動の面から捉えられることはないが、当歌の詠みぶりや、【作者】に示した、出家後の惟方らとの和歌を通じた交流などを見ると、文芸活動にも関心を寄せていたものと推測される。

（中村）

隆信朝臣ヒサシクヲトツレ侍ヲ

サリケレハ九月ノスエニ山里

ヨリイヒツカハシケル

寂超法師

329

ミヤマキノクチハノチラヌホトタニモ

トハレ□□「」ルキミニモアルカナ

【整定本文】

隆信朝臣ヒサシクオトツレ侍ラザリケレバ、九月ノスエニ山里ヨリイヒツカハシケル

寂超法師

ミヤマキノクチバノチラヌホドダニモトハレ「」ルキミニモアルカナ

【現代語訳】

隆信朝臣から長らく便りがありませんでしたので、九月の末に山里より言い遣わした

寂超法師

深山木の朽葉が散らないように、山住みの老いた私がこの世にいる間でさえ、「」あなたなのですね。

## 【他出】『隆信集』八五三

山入道、ひさしくおとづれぬおぼつかなさなどうらみつかはして

みやまぢのくち葉のちらぬ程だにもとはでとしふる君にもあるかな

【作者】寂超法師。俗名は藤原為経、初名は盛忠。為忠の子。生没年未詳だが、永久年間（一一一三〜一七）の初め頃の生まれで、治承四年（一一八〇）頃までは生存と推測される。兄の寂念（為業）、弟の寂然（頼業）と共に常磐（大原）三寂と呼ばれる。備後守、長門守などを務める。藤原親忠女（美福門院加賀）との間に隆信をもうけたが、隆信誕生の翌年康治二年（一一四三）には出家、比叡山に入った。大原で寂然と止観を学ぶ。『為忠家初度百首』『為忠家後度百首』、住吉社歌合などの作者となるほか、『詞花集』を難じた『後葉和歌集』を編纂した。『千載集』以下の勅撰集に一五首入集。《参考文獻》井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』第三章六「常磐三寂年譜考―付範玄・三河内侍・隆信略年譜―」（笠間書院 一九八八年）、鈴木佐内「藤原為忠の事歴とその子常盤の三寂の出家をめぐる」（『智山学報』三七、一九八八年三月）

【語釈】○隆信朝臣 ↓320 【作者】。○オトツレ 「おとづる」には実際に訪問する意もあるが、手紙や便りを送る意味もある。ここでの「おとづれ」がどちらの意なのか判断しがたいが、ひとまず便りの意で解した。手紙すら長らく途絶えた状況の方がより薄情さが際立つ。○九月ノスエ 秋の最後の月である旧暦九月の下旬。特に末日は「九月尽」とも呼ばれ、過ぎゆく秋を惜しむ日であり、歌題としても定着していった。当歌では「末」とあるのみで、末日であったかどうかは不明だが、寂寥とした秋の終わりであることに変わりはない。暦の上では十月からは冬であり、冬になれば木の葉は完全に散ってしまう。冬が目前であることを詞書に記すことで、「朽葉、そして老いた私の命は今にも散ってしまいうさです。その前に訪れ／便りをしてほしい」という文脈も読み取れるだろ

う。また冬になれば山里への通り路は落葉や雪で埋もれ、途絶えがちになる。その意味で、「九月の末」という言辭は山との交流が難しくなる冬が迫っていることを包含し得る。○山里 山中の人里。山奥の家、山莊。○ミヤマキノクチバ 「深山木」は山の奥深くにある木、「朽葉」は朽ちた葉。山里に住む老いた自らを例えている。また、奥深い山で人に知られないで存在している、人から忘れられている、というイメージも喚起される。「朽葉」は、「みやまにはいはかげもみぢちりはててくちばのうへにゆきぞつもれる」（江帥集・一二七）、「みやまぎのくちばが下のむもれ水かきながさばや恋しとだにも」（衛門督家歌合・四六・能輔）のように、木から散り、地面に落ちた状態の落葉を示す例が多いが、当歌では「散らぬほど」と詠んでいるため、まだ木に付いている状態の枯れ葉を指しているのであろう。「かかりけるふぢのくちばをときはなるさかきといかでさしてみつらむ」（大齋院御集・三八）なほゆかしくて、わらべしてとりにやりてみれば、ふぢのはのあかみたるがかれたるなりけり、「秋見しはそれとはかりのはぎが枝にしものくち葉ぞ一葉のこれる」（徽安門院一条集・五三）のように、色変わりした葉や枯れた葉など、まだ木から散っていない葉を指す例も少ないながら存する。また老いた身を「朽葉」に例える例としては、「うもれ木のわれがくちははなにはなるながらの橋のはし柱かな」（能因法師集・一九九「歎老五首／歯落如朽株」）、「竹のよもわが世もともに老いにしを朽葉さやにもおけるしもかな」（新撰朗詠集・四〇六・道真）などがある。なお『隆信集』では「みやまぎ」ではなく「みやまち」で収載される。○ダニモ せめて／＼だけでも、／＼でさえ、の意。○トハレ／＼ル 虫損により判読不能。『隆信集』には「とはでとしふる」の形で載る。『言葉集』でも同様の意の語句が入っていたか。詞書の「おとづれ」が訪問の意味であれば「訪ねてくれないまま年月を過ぐす」、便りの意味であれば「安否を問うてくれないまま年月を過ぐす」のような文脈になるだろう。

○キミニモアルカナ 恋歌の結句に置かれることが多い言辭で、相手がどのような存在であるかを示す。「春霞た

なびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな（古今集・恋四・六八四・友則）、「おとにきく人に心をつくばねのみねどこひしききみにもあるかな」（拾遺集・恋一・六二七・読人不知）のように相手の素晴らしさ、相手への恋しさを詠う肯定的な用いられ方がある一方、「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」（後撰集・秋下・四二三）「あひしりて侍りけるをとこのひさしうとはず侍りければ、なが月ばかりにつかはしける」（右近）は、相手の薄情さを恨むという否定的な詠み方と言えよう。ただし両者ともに根底にあるのは相手への執着である。なお『後撰集』の右近の歌は、相手の訪問が久しく途絶えた九月に詠まれている点が当該歌と類似する。寂超はこの右近詠を念頭に詠歌したか。

**【補説】**寂超は息子隆信が生まれた翌年すぐに出家、その後は隠遁生活を送った。当該歌が詠まれた年次は不明だが、ある程度隆信が成長した後の詠であろう。息子からの便りもしくは訪れが長らく途絶えていた折、それを心寂しく思った山里暮らしの寂超が子に送った一首である。老いた自分を奥山の枯葉に重ね、息子の音信を促すような一首になっている。同じ詠が『隆信集』にも収められているが、初句「みやまぢ（深山路）」の形で収載される。どちらでも解釈可能だが、「ぢ（路）」の場合は、会いに来るまでの道のり、山路が想起され、「その山路を通ってあなたは会いに来てくれないのですか」といった印象が強くなる。また朽葉が散れば山路は落葉で埋まってしまう。その前に訪ねてください、というメッセージも持ち得るだろう。一方、「ぎ（木）」の場合は、返歌の「このもと（木のもと）」と響き合う。また人から存在を忘れられた山奥の木が想起され、「あなたは私のことを忘れてしまったのですか」という含意が滲み出る。かつ、山奥の木の枝になんとかしがみついている枯葉の像も喚起されようか。

（小林）

返□

隆信朝臣

330 チトセトモハルカニタノムカケナレハ

コノモトマテモノトカニソオモフ

【整定本文】

返□

隆信朝臣

チトセトモハルカニタノムカゲナレバコノモトマデモノドカニゾオモフ

【現代語訳】

返し

隆信朝臣

千年とも遙か先まで頼みとする木陰のように、父上の庇護をこの先も長く頼りにしていますから、その木のもとではありませんが、子の私までも安心して穏やかに思っておりました。

【他出】『隆信集』八五四

かへし

ちとせともはるかにたのむかげなればこのもともでものどかにぞおもふ

【作者】藤原隆信 ↓320 【作者】

【語釈】○チトセトモハルカニタノムカゲナレバ 末永く頼みとする木陰に、父の存在を重ねる。「たのむ・木・かげ」を詠み込んだ歌には、「わび人のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢりけり」(古今集・秋・二九二)「うりむゐんの木のかげにたたずみてよみける」(遍昭)のように実際の植物の木陰を詠む例もあるが、頼りとする者の存在、ひいてはそうした者から受ける恩恵、庇護を表す歌も多い。中には政治的な意味合いを持つ例もあるが、出家隠遁の身である寂超から政治的な恩恵を受けることは現実的ではないだろう。当歌における「かげ」は長寿を保ち、子である自分を見守り続けてくれる親の存在を意味していると解した。子にとって親が「かげ」で

ある例歌としては、「みやま木のたのみしかげもかひなくてたまらぬ雨とふるなみだかな（小侍従集・八五）「おほひのみかどの右大臣かくれさせ給ひて、大宮へ人人の御なかにとて」がある。大炊御門右大臣公能の死に際して、その娘の大宮多子の御所に送った弔問歌である。また「ちらぬさきはなになきそ驚よたのむかげなき我ぞよにふる」（基俊集・七「大宮の右大臣うせ給ひてまたのとし、みなみおもてのさくらにうぐひすのなきけるを聞きて」は、基俊が亡父である大宮右大臣俊家を思つて詠んだ歌である。いずれも「かげ」は親の存在を暗示しており、当降信詠と共通する。○コノモト 「木のもと」に「子のもと」を掛け、寂超の子である隆信自身を指す。「たのむ・かげ」とともに用いられた例としては、亡父の筆跡にちなんで詠まれた「このもとはかくことのはをみるたびにたのみしかげのなきぞかなしき」（千載集・雑中・一一〇六・実家）等がある。○ノドカニゾノフ 「のどか」は、心が落ち着き、穏やかである状態。「きみが代のちとせのはるしくはればはなもものどかにおもふらんやぞ」（大式高遠集・二二）、「さはつるののどかにあそぶけしきこそちとせふるまふすがたなりけれ（源大納言家歌合・七・師房）のように、長く安定した治世や長寿に対して用いられることが多い。当歌では、「父君の長寿を確信していたからこそ心のどかに安心していたのです」と詠い、転じて、長らくの無沙汰の言い訳にもなっている。

**【補説】**子が長らく顔を見せないことの寂しさを詠んだ寂超への隆信の返歌。「いつこの世を去つてもおかしくない私ですのに、あなたは長らく音信くださらないのですね」と嘆く父に、「あなたの長寿を確かなものと信じていたからこそ、すっかり安心しておりました。長期の無沙汰はそのせいなのです」と弁解していることになる。寂超が自身を今にも散りそうな深山の朽葉に例えたのに対し、隆信はその父を遙か千年先まで頼りになる木陰に例え、長寿を言祝ぐ歌にして応えている。なお本贈答（329・330）の直前327・328番は平親範・基親親子の贈答であり、父子の贈答二組が並んでいることになる。また贈答の季節も「十月ばかり」（327・328）と「九月の末」（329・330）であ



り、秋の終わりから冬の初めにかけてという類似点もある。ただし基親が自発的に父を思いやって贈歌しているのに対し、隆信は長らく無沙汰をした上に父からの便りでようやく歌を送っている。様相の異なる二組の父子の贈答を並べたのは、その対比を興じているのであろう。

（小林）

ヒエノ山ニスミ侍ケル童ノ

アカラサマニ里ヘイテケ（ル歌）ヨシヲ

申テ三井寺ヘナムマ（カ歌）□リ

ケル（ヲ歌）□キ、テイヒツカハシケル

阿闍梨琳仁

331

ヤマノハ（ニ歌）□マツヲ（ハ歌）□シヲテ月カケノ

マコトヤミ井ノ水ニスムナル

【整定本文】

ヒエノ山ニスミ侍ケル童ノ、アカラサマニ里ヘイデケルヨシヲ申テ、三井寺ヘナムマカリケルヲキ、テ、イヒツカハシケル

阿闍梨琳仁

ヤマノハニマツヲバシヲデ月カゲノマコトヤミ井ノ水ニスムナル

【現代語訳】

比叡山に居住しておりました稚児が、ちょっと実家へ（帰るといっているので山から）出るといふことを申して、（その実）三井寺に行ったと聞いて、（その童に）詠んで遣わした

阿闍梨琳仁

山の稜線から（月が）出て来るのを私が待っているのも知らないで、月の光は、ほんとうにまあ、御井の水面に澄んだ光を落としているとか言うことだ（比叡の）山の端で私が待っているのも知らないで、私が愛する童は、なんとまあ、三井寺に住んでいると聞きましたよ。

【他出】『沙石集』巻第五末ノ二（新編日本古典文学全集、小島孝之校注『沙石集』による）

ある藏人の五位の、子を山へ登せたりけるが、禅衆行人の房になむありけり。見目形直しき児なりけるを、里へ下りたる次でに、寺法師、すかし取りて、寺に置きてけり。

山僧、この事を聞き、「我が山は、他寺の児をこそ取るべきに、寺法師に取られぬる事、口惜し」とて、三塔会合して、大衆憤りののしりて、先づこの師の行人を、大講堂の前に据ゑて、事の子細を問ふに、「児共の、里に久しく候ふ事、常の習ひと存ずるばかりなり。三井寺に候ふらん事、つやつや承り及ばず。先づ状を遣して見候はむ」とて、紙と硯を取り寄せてぞ、云ひやりける。

山のはに待つをば知らで月影のまことや三井の水にすむなる

寺法師、これを見て、感じて、別の子細に及ばず、山へ送りてけり。

【作者】阿闍梨琳仁。『尊卑分脈』および同時代の記録類に記載はなく、系譜未詳。和歌の内容から、延暦寺僧であつたと推測される。現在残る和歌事績は、当歌および夫木抄に入る二首の計三首のみ。夫木抄に入る歌は、久安五年（一一四九）七月山路歌合と承安二年（一一七二）法輪寺歌合での詠。

【語釈】○ヒエノ山 比叡山延暦寺。○童 稚児。琳仁の寵童であろう。○アカラサマニ 一時的にしてみるさま。ちよつと。○里 実家。○三井寺 園城寺。近江国、現在の滋賀県大津市に所在する天台宗寺門派の総本山。○ヤマノハ 山の稜線。「やどごとにかはらぬものは山のはの月まつほどの心なりけり」（後拾遺集・雑一・

八四三・加賀左衛門）のように、月が出てくる場所と捉えられ、月の出を待ち設ける人々が注視する対象として詠まれた。当歌では、琳仁が身を置く比叡山を指す語としても機能している。○マツヨバシラデ 私が待っているのも知らないで。「よもすがらまつをばしらで時鳥いづれの山のかひになくらん」（続詞花集・夏・一〇八・成範）、「住吉のまつをばしらで子規遠里小野の方に鳴くなり」（治承三十六人歌合・九四・寂念）のように、作中主体が美的対象に接するのを望んでいるのに、まるでそれを知らぬげに、対象が姿や声を現わさない、という状況を示す措辞として、平安末期以降の用例が残る。○月カゲ 月の光。ここでは童を表徴する。恋しく思う相手等待つ気分を、山の端から出る月にこと寄せて表現する歌に、「かくのみや君をばまたん山のはにふけていでくる月まつがごと」（古今六帖・二八二二「人をまつ」）がある。○マコトヤ 感動詞「まこと」に間投助詞「や」を添えた語。ほんとうにまあ。口語的な表現で和歌にはほとんど用いられない。強い驚きを身振りとして示すために、敢えて用いたか。○ミ井ノ水 「三井寺」の名は、この地に豊かな泉水が湧くことに由来し、『寺門伝記補録』には、天智・天武・持統の三天皇誕生の折、この水を産湯に用いたことから御井と名付けられたという伝承が載る。これを受けて、平安末期以降、特に僧による詠作に、「位山高くのぼらんと思ふかなわが三井にすむかはづなれども」（夫木抄・一二四二三・教智）、「すまざりしことぞくやしきかき流す三井の玉水見るにつけても」（楢葉集・九一三・俊恵）のように、「井」と縁語を形成する「水」「澄む」等の語を寺名とともに詠み込む作が現れた。○スムナル 「澄む」に「住む」を掛ける。「なる」は伝聞の助動詞。

【補説】寵愛の対象としていた稚児を月影に喩え、その稚児に会いたい恋情を、山の端から月が出るのを待つ気分に重ねる。また、さやかな月光が御井の湧き水に映じている光景は、比叡山を離れた稚児が、園城寺僧との男色関係により同寺に身を留め続けている状況を、おほめかしつつ示すのであろう。すなわち、この一首には、稚児を

めぐる事態と、月に関する叙述との、二重の文脈が存する。ここでは、月への憧れを叙した文脈が前面に押し出され、稚児への恋情はその裏に隠されていると解して現代語訳を施した。  
(中村)

ヨソムキテノチアキコロ

ハウキノ大山トイフ<sup>(下テ)</sup>□□<sup>(下テ)</sup>ロヘ

マイルトテ桜トイフ山寺

ヲタツヌ<sup>(下テ)</sup>□□<sup>(下テ)</sup>ヨミ侍ケル

貞憲入道

332 サモコソハオリシラヌユヘトイ<sup>(七)</sup>□<sup>(七)</sup>ナカ

ラ アキヤサクラノヤマヲタツネン

【整定本文】

ヨソムキテノチ、アキゴロ、ハウキノ大山トイフトコロヘマキルトテ、桜トイフ山寺ヲタツヌトテヨミ侍ケル  
貞憲入道

サモコソハハリシラヌユエトイヒナガラアキヤサクラノヤマヲタツネン

【本文に関する注】歌の二行目、一字目「ラ」の下に虫損アリ。四句目の一字目「ア」との間に一字分ほどの空白を置き、上下句の間を明確にしようとした可能性があり、「ラ」の下の虫損箇所には字が書かれていなかったと考えて、本文を翻刻した。

【現代語訳】

出家遁世した後に、秋頃、伯耆の大山(寺)という所に参詣しようとして、桜という山寺を訪れるというので詠みました  
貞憲入道

まことにそうであればこそ(なのですが)、世俗を離れて時めくこともない(この身で)、季節も弁えないからと言  
い訳しながら、(桜は咲かない) 秋に桜の山を訪れるのでしょうか。

【作者】 貞憲入道。藤原貞憲。信西(藤原通憲)男。母は高階重仲女。生没年未詳だが、同母兄俊憲が保安三年(一一二二)生であることを勘案すると、天治(大治頃(一一二四)―一一三〇)の生か。飛騨守(保延六年一一四〇任―勅撰作者部類)、右衛門権佐を経て、保元三年(一一五八)八月、権右少弁摂津守となる。同年十一月、藏人に補され三事を兼帯した。翌平治元年(一一五九)五月一日、権左少弁に転任、同日従四位下に叙さる。同閏五月には権右中弁に昇任したが、同年十二月の平治の乱に連座して解官、土佐に配流された(平治物語では隠岐)。「尊卑分脈」には「哥人」と注があるものの、和歌事績は当歌の他、『千載集』『月詣集』に各一首(同一歌)が入るのみだが、顕昭と交流のあったことが、『言葉集』所載歌(補説)参照)によって知られる。『千載集』入集歌は、貞憲母が没した同じ年に信西室紀伊二位も没したことを受けた詠で、これにより紀伊二位朝子没の仁安元年(一一六六)まで生存したことを確認しうる。なお、『伝法灌頂師資相承血脈』(築島裕翻刻)、『醍醐寺文化財研究所紀要』1、一九七八年)に一海の灌頂の弟子として記載される「生西」という人物に、「成戈説貞憲/法名也出、」の注が見える。

【語釈】 ○ヨヲソムキテノチ 出家遁世した後に。時期は不明。 ○ハウキノ大山 伯耆国(現在の鳥取県西部)に所在する山岳大山。だいせん標高一七三一メートル。古代から中世にかけて修験の道場として栄えたが、その中心は大

山中腹にある天台宗の寺院大山寺だいせんじであった。「大山」は、あるいは「大山寺」を指すか。○桜トイフ寺 現鳥取県倉吉市桜に所在する天台宗の寺院大日寺だいにちじか。「桜山」と号す。もとは熊野信仰の修験・霊場で、平安末期から鎌倉時代にかけては大いに栄えた。現在、鰐淵寺（鳥根県出雲市）に蔵される鐘には「伯耆洲桜山大日寺上院」の銘が見え、寿永二年（一一八三）五月に改鑄されたものと知られる。「桜トイフ寺」が大日寺に比定されることについては、米田真理子氏の示教を得た。○サモコソハ 係助詞「こそ」による係り結びが元来は「あれ」と続いていたと考えられ、これが省略された形と解した。まことにその通りなのだが、の意。口語的な表現で、指示副詞「さ」は、「折知らぬ」我が身をやや自虐的に指し示す。○イヒナガラ 言い訳しながら。○ヨリシラヌ 時宜を得ないの意と、季節を弁えない意を掛ける。「折り」と「桜」が縁語。「折り知らぬ」の措辞は用例が少なく、勅撰集には三例が見えるのみである。「はかなさによそへてみれどさくら花をりしらぬにやならむとすらん」（後拾遺集・雑一・八九八・小左近）では、「場合を弁えない」意、「みな人はよしののやまのさくらばなをりしらぬ身やたにのむれ木」（金葉集・雑上・五二三・源定信）では、「時宜を得ず時めていない」意に「枝を折り取ることもない」意を掛ける。○サクラノヤマ 「桜の山」「桜山」の用例は少なく、近江国の桜山が、「松の色の常葉にみゆる桜山花の匂ぞ久しかるべき」（大嘗会悠紀主基和歌・二五九・輔親）の他、匡房・俊成等に悠紀主基和歌の作が残る。当歌においては、大日寺の山号「桜山」を指すのであろう。

【補説】『玉葉集』雑三・二二七一番の顕昭歌の詞書に、「藤原貞憲朝臣出家の後、高野にこもり侍りける時、大原の坊にまかれりけるに、あはれなる事を障子にかきて侍りけるをみて、そのかたはしにかきつけ侍りける」と見え、出家後の貞憲が一時、天台別所の大原に身を置いていたことが知られる。当歌の詞書に現れる大山および大日寺はともに天台寺院であり、世俗を離れた貞憲が天台宗のネットワークを通して求道に励んでいたことが推察され

る。大山や桜山を訪ねたのは真摯な宗教心に発した行為であろうが、この一首は、「秋に桜の山を訪ねる」自らの行動を、「折知らぬ」無風流なものとして笑ってみせる戯れた性格の歌である。季節を理解しない無風流さを自分でも自覚していることは、二三句で「言い訳しながら」と表現しているが、初句「さもこそは」の口語的な措辞により、二句以下の行動について、「ですからね」と自虐的に言ってみせているのである。（中村）

山寺ニコモリキタマヘリケル

水ノ（毛敷）トノコ、ロホソク侍リ

ケレハ 花蔵院法印（元敷）

333

□（毛敷）スカラマクラニオツル□トキケハ

コ、ロヲ□ラフタニカハノ水

【整定本文】

山寺ニコモリキタマヘリケル、水ノオトノコ、ロボソク侍リケレバ

花蔵院法印元

□モスガラマクラニオツル□トキケバコ、ロヲ□ラフタニガハノ水

【現代語訳】

山寺に籠もっていらつしゃった頃、水の音が寂しげでしたので

花蔵院法印元

一晩中、枕に落ちてくるような水音を聞いていると、心を洗い清めるものだったなあ、谷川の水は。

【他出】『月詔集』八七四「題しらず」

よもすがら枕に落つる声聞けば心をあらふやま川のみづ

○『今鏡』御子たち 第八・腹々の御子（竹鼻續『今鏡（下）全訳注』講談社、一九八四年）

また御行ひはてて、やすませ給ひけるに、嵐はげしく、滝の音むせびあひて、いと心細く聞えけるに、夜もすがら枕に落つる音聞けば心をあらふ谷川の水

と詠ませ給へりけるとぞ聞え侍りし。昔の風吹き伝へさせ給ふ、いとやさしく。

【作者】元性↓314【作者】

【語釈】○山寺 山中にある寺。具体的な場所は不明だが、元性は一時、大和に居していたらしく、その折に寂蓮に贈った歌「我ならぬ月もすみける山ざとをとはずば君が名こそ惜しけれ」（寂蓮法師集・三三二）にて自身の居所を「山里」と表現している。当該歌がこの大和滞在時の詠かは判断し難いが、類似する状況であることは示唆的である。「山寺」という人里離れた隠遁地を詞書に提示することで、歌そのものの寂寥感をも増幅させているのだろう。○水ノオト 詞書では何の水の音かは示されていないが、その後の和歌によって谷川の水音であることが分かる。○ココロボソク 形容詞「心細し」は、頼るものがなく不安な様子、そこはかとなく寂しい様子などを表す。当歌においては後者で解釈した。人の訪れも希な山寺でのうら寂しい状況こそが、仏教者としての真理に近づくことができる環境なのであろう。○□モスガラ 判読不能の字は他出により「ヨ」と推定し解釈する。一晚中、夜通し。元性には他にも「よもすがら月にむかしのながめしておもへばかなしあなうよのなか」（万代集・三〇一九・法印元性）と、「よもすがら」を用いた歌が残っている。○マクラニオツル□ト 一字判読不能だが「ヲ」と推定される。『月詠集』では「音」ではなく「声」となっている。「枕に落つる」が詠まれる際は、「滝つせはおとにぞたたじ恋すれば枕におつる涙なりけり」（統詞花集・五三一・読人不知）や「しきたへの枕におつる月みればあれたる宿もうれしかりけり」（清輔集・一四六）のように、枕そのものに涙が落ちたり、月光が投影されたりする例



もある。一方で声や音の場合は、「ねざめするまくらにおつるたきのおとにむすばほれたる夏の夜の夢」（千五百番 歌合・八四三・家長）や「そばだつる枕におつる鐘の音も紅葉をいづる峰の山寺」（拾遺愚草・一一三九）のごとく、まるで枕に落ちてくるように何かの音が耳元近くで聞こえる状況を表す。○ココロヲ□ラフタニガハノ水 判読不能の字は他出により「ア」と推定し解釈する。「心を洗ふ」の古い例は寂然の「あきのよの月のひかりのさびしきにこころをあらふやまがはの水」（唯心房集・九二）であり、その後、当歌に続き、「朝夕に三世の仏につかふれば心をあらふ山川の水」（後京極殿自歌合・一九五）や「苔むしる岩ねの枕なれ行きて心をあらふ山水のこゑ」（式子内親王集・八六）などが詠まれた。この後京極殿自歌合・一九五番の判詞で俊成は「心をあらふ山川の水、かの泉飛雨洗声聞の夢と云へる心を思出でられて、文の心の上になすがたこと葉もをかく侍るにや」と、『和漢朗詠集』収載の摘句「泉飛雨洗声聞夢 葉落風吹色相秋」（五八四・相如）を引用して評価している。また慈円は『和漢朗詠集』五七九番・白居易の「更無俗物当人眼 但有泉声洗我心」を句題に「うれしくもながむる空はむなしくて心をあらふ山の井の水」（拾玉集・一九七五）を詠んだ。おそらく元性も『和漢朗詠集』所収のこれらの漢詩を念頭に、当歌を詠んだのではないだろうか。なお『月詣集』では「谷川」ではなく「山川」となっている。

【補説】人里離れた山寺にて寂寞たる谷川の水音を聞いて詠んだ一首。釈教歌のようでもある。沐浴や水垢離といった仏教儀礼が示すように、そもそも水は穢れを洗い流し、心身を清めるものである。「洗心甘露水」（善導『往生礼讃』）のような措辞もそれを物語っていよう。当詠では水そのものではなく、水の音によって心が洗われたと詠っている。夜、枕に頭を預けていると、閑静な山寺に響く寂しげな谷川の水音はまるで耳元に聞こえるようである。それを一晩中、眠ることなく聞いていると心が洗われるようで、仏教者としての真理に近づいていく。そのような澄み切った心境を詠った一首であろう。【語釈】で示した通り、『和漢朗詠集』収載の摘句を念頭に詠んだので

はないだろうか。『月詣集』では「枕に落つる音」ではなく「声」となっているが、「声」の方が元と考えられる漢詩に近い。また結句も、『月詣集』では「谷川」ではなく「山川」となっている。「心を洗ふ山川の水」ならば寂然や良経なども詠んでいるが、「心を洗ふ谷川の水」は他に例がない。「谷川」の方が、ひっそりと人目につかないイメージが強い。なお【他出】で掲げた『今鏡』では元性のことを「昔の風吹き伝へさせ給ふ」と、和歌に秀でた崇徳院の遺風を継承している存在と評し、その代表歌として当詠を掲げている。また配列に関しては、319番から出家や遁世など仏教的なことに関わる歌が並んできたが、当333番にてその流れが止まる。

(小林)

松映水トイフ事ヲ

四条民部卿

334 チトセフルマツカ木カケヲソフレハヤ

シタ□クミツノミト□ナルラン

【整定本文】

松映水トイフ事ヲ

四条民部卿

チトセフルマツ□木カケヲソフレバヤシタ□クミツノミド□ナルラン

【現代語訳】

松映水という事を

四条民部卿

千年生きるという松の木の姿が添い加わったからだろうか。その下を流れゆく水が緑なのは。

【詠出機会】 康和元年（一〇九九）四月三日齋院令子内親王家御遊《参考文献》所京子「齋院令子内親王関係の和歌集成」（『聖徳学園女子短期大学紀要』一五、一九八九年三月）、久保木哲夫・加藤静子『藤原頼宗集 師実集 全 釈』（花鳥社、二〇二二年）、高野瀬恵子「令子内親王家の文芸活動―院政前期の内親王とその周辺―」（総合研究

大学院大学 博士論文 学術情報リポジトリ、二〇〇九年三月)

【作者】藤原忠教。師実五男。母は藤原永業女。承保三年(一〇七六)生、永治元年(一一四一)没。叙爵の後、民部権大輔、尾張守、齋院長官などを歴任し、康和元年(一〇九九)藏人頭、同二年参議となる。以後、権中納言、民部卿などを経て、正二位大納言に至る。太皇太后宮大夫として後冷泉天皇の皇后寛子、中宮大夫として崇徳天皇の中宮聖子などにも仕えた。保延七年(一一四二)三月、出家。法名寛禪。その年の一一月に没する。四条中納言、四条民部卿などと呼ばれた。和歌の才もあり、郁芳門院根合、堀河院艶書合などに出詠。『言葉集』以下の勅撰集に八首入集。《参考文献》奥田久輝「藤原忠教とその系譜―新古今作者考―」(『園田国文』五、一九八四年三月)

【語釈】○松映水 水に映った松を表す歌題。同題および類似した題はいくつか見出せ、当該歌の詠歌の場もある程度推定できる。詳細は【補説】参照。○チトセフルマツ□コカゲ 一字判読できないが、おそらく「ノ」が入るであろう。松は末永く続くことの象徴であり、「千とせふるをへの小松うつしうゑて万代までのともとこそみめ」(千載集・賀・六二八・基房)のように、しばしば「千歳」とともに賀歌に詠まれる。「かげ」は、光そのもの、光が当たった物体の背後にできる闇の部分、水や鏡に映った姿など、様々な意味を持つ。「木かげ」の形では、「いくとせにかへりきぬらんひきうゑし松の木陰にけふすむかな」(能因法師集・一一二二)、「さきかかると松の木陰に立ちよればをらでも藤をかざしつるかな」(正治初度百首・一九二二・二条院讚岐)のように、木の下にできる陰影を指す例が多く、木の姿を指す使用例は見出し難い。ただし当該歌では「松映水」という歌題であるから、水に映った松の姿を「木かげ」と表現したものと解釈した。類例に、「千とせへて花さく松のいとどしくのどけき水に影ぞうつれる」(新統古今集・賀歌・七五二「寛治元年十一月鳥羽殿にて、松影浮水といふ事を講ぜられけるに」師実)等がある。○ソフレバヤ 動詞「添ふ」の已然形に順接確定条件の助詞「ば」、疑問の助詞「や」がつ

いたもの。他に使用例はないが、類例としては「ちよのみとみぎはのまつの見えぬかなかさねてなみのかけをそふれば」（左大臣家歌合（長保五年）・三二・輔尹）がある。○シタ□クミヅノミド□ 虫損により二字判読できないが、内容を考えると「したゆくみづのみどり」と思われる。「下行く水」は単に「下水（したみず）」とも言う。「松」との組み合わせとしては、「嵐ふく梢になみの音はして松のした水うす氷せり」（老若五十首歌合・三三〇・良経）等があるが、数はあまり多くはない。後代の詠だが、「影うつすその色さへふかみどりむすぶもすずしまつの下水」（仙洞歌合・四二・崇光院）の例がある。また常磐の松の緑は永続性の象徴であり、祝意を帯びた景物である。「ちよをへてすむべきやどの池水は松のみどりに色ぞみえける」（能因法師集・一六〇）、「いけみづにまつのみどりをうつしてぞちとせのかけもいろまさりける」（江帥集・一五六）等の類歌同様、長寿や長久を想起させる「みどり」は当該歌においても祝意性を有している。次の【補説】にて掲げるが、当該歌と同一機会に詠まれた師実、忠実の歌には、紫野の齋院の側を流れる有栖川が詠まれており、当忠教詠の「下行く水」も有栖川を想定しているのかもしれない。

【補説】当該歌の詠歌事情は、諸資料からある程度推定し得る。まず「松映水」という歌題は、忠教の父である師実の家集に次のように見出せる（ただし『千載集』『月詣集』『定家八代抄』では「松枝映水」題で収載されている）。

康和元年四月三日、齋院ニテ、松映水

チハヤフルイツキノ宮ノアリスガハマツト、モニゾカゲハスムベキ（京極大殿御集（師実Ⅱ）・三二）

また、師実の嫡男師通の子である忠実も同じ折に詠歌している。

康和元年四月三日齋院にて、松みづに映ずといふことをかうぜられけるによみ侍りける

富家人道前闕白

ありす河松のよはひのかげ見えて千よもいつきのすみぬべきかな（秋風和歌集・六二四）

康和元年とあるが、康和への改元は承徳三年（一〇九九）八月二八日のため、厳密に言えば四月はまだ承徳三年である。関連する記述が『後二条師通記』承徳三年（康和元年）四月一日条および三日条にもある。

四月一日、……於齋院可有和歌、題者余所擇申也、松葉映水、令中将家政覽於殿、帰来了……

四月三日、……參齋院小弓、次鞠、殿上人以下所勤仕也、酒肴了於簀子敷有管絃事、秉燭之後講和歌、中宮大夫

・權大納言・左大将・二位中納言・頭弁宗忠、

さらにこれと同機会に詠まれたであろう歌が次の二首である。

四月一日、殿ばら、人人ぐしてまゐらせ給ひて、うたよませ給ひしに、まつのは水にえいず、といふ題  
ちとせふるきみがときはのまつのははみづにうつれるかげものだけし（前齋院撰津集・五三）

本院にて人人まゐりて、まつのはみづにえいずといふ心、よませたまひしに

のどかなるみづにうつれるまつかげはちよをばかはと見するなりけり（二条太皇太后宮大式集・八二）

これらの諸資料を踏まえると、次のような状況が想定できる。承徳三年四月三日、齋院令子内親王の御所にて御遊が行われ、これに先立つ四月一日に歌題として「松葉映水」あるいは「松映水」が選ばれた。そして令子内親王を後見していた師実をはじめ、その子の忠教や孫の忠実、また令子の女房である撰津、大式らが歌を用意し、三日に披露された。『秋風和歌集』六二四番詞書で「かうぜられける」とあるのがこれに該当しよう。『中右記』にも承徳三年四月三日条に「三日、於齋院御遊、〈両殿下参、〉との記述がある。「両殿下」は当時の関白師通および前関白師実のことであろう。ただ、諸資料により「松映水」「松枝映水」「松葉映水」と題が若干異なる点、および『前

『齋院撰津集』では人々が参集したのが四月一日と記されている点が気にかかる。だが三日のうちに近似した題で二度も和歌会が催行されたとは考えにくい。歌題の異同は誤写や字の脱落が原因かもしれないし、『前齋院撰津集』の日付は出題と披講の日を取り違えた可能性もある。あるいは題に関しては、四月一日に出題された時点では「松葉映水」であったが、三日の披講では「松映水」として講ぜられたか。細かな点に疑問は残るものの、おおよそは右のような状況が想定される。令子内親王は白河天皇皇女で、郁芳門院や堀河天皇の同母姉妹である。生母の中宮賢子は源顕房女だが師実の養女となっており、令子内親王自身も誕生時より師実夫妻に養育されている。令子御所は師実、師通の庇護のもと風雅の場として華やいだ。当該歌が詠まれた御遊も、撰閲家を後見とした晴れやかな雅事であったのだろう。忠教詠をはじめとしてこの場で詠まれた歌に祝意性が滲んでいるのは、「松」という長久の象徴が題に含まれていることに加え、師実一族が後見となっている令子内親王への敬親の念も根底にあるだろう。

(小林)

宇治ニテ波声混雨ト云

事ヲ 俊綱朝臣

335 カハナミノヲトニマキレテアメフレハ

ヌレヌカキリハシラレザリケリ

【整定本文】

宇治ニテ波声混雨ト云事ヲ

俊綱朝臣

カハナミノヲトニマギレテアメフレバヌレヌカキリハシラレザリケリ

【現代語訳】

宇治で、「波声混雨」ということを

俊綱朝臣

川波の音にまぎれて雨が降るので、(その雨に)濡れない限りは、(雨が降っているのか否か)わからないことよ。

【作者】 橘俊綱。長元元(一〇二八)〜寛治八年(一〇九四)七月一日、六七歳。実父は関白藤原頼通、母は従二位祇子であるが、正妻隆姫の恠気によって橘俊遠の養子となる。養子に源俊頼がおり、その詠歌に影響を及ぼしたとされる。正四位上修理大夫に至り、伏見修理大夫と号す。最古の造園書『作庭記』の作者と目される。伏見に邸を営み、そこで行われた歌合や歌会は「伏見の会」とも呼ばれた。能因、範永、良暹、経信らとの交流をもち、特に経信とは、息俊頼を俊綱の養子にするなど近い関係にあった。『後拾遺集』以下の勅撰集に一二首入集。家集「俊綱集」二冊が存したことが知られるが、現在は散逸(久保木秀夫「中古中世散逸歌集研究」第三章第二節、青簡舎、二〇〇九年)。《参考文献》斎藤熙三子『赤染衛門とその周辺』第三部Ⅲ「橘俊綱考」(笠間書院、一九九九年)、吉原栄徳「橘俊綱の作歌活動」(『平安文学研究』五四 平安文学研究会、一九七五年十一月)

【詠出機会】 歌会名未詳、永承元年宇治殿歌会と仮称する。「波声混雨」題は、「うぢ河の早瀬に波のこゑすればふりくる雨をしる人もなし」(玉葉集・雑二・二〇七〇「永承元年、宇治にて浪声混雨といふことを」隆国)、「かはなみのつねよりことにおとするはいたくしぐれのふればなりけり」(範永集・一六九「なみのこゑあめにまがふ、宇治殿にて」)のように同じ場・同じ題で詠まれた歌が残り、「あらしそふしぐれのあめのすはえにはせぜのをなみのたつそらもなし」(頼宗集・五二「於宇治殿乃伝聞雨声階波題」)も同じ時期に詠まれたかとされている。ただし先行研究では、当該歌は同じ折りの詠としては掲げられない。永承元年(一〇四六)に、後に平等院となる「宇治殿」で歌会が催されたと想定できる。《参考文献》久保木哲夫他『範永集新注』(青簡舎、二〇一六年)、久保木哲夫他『藤原頼宗集 師実集 全釈』(花鳥社、二〇二一年)

## 【語釈】○宇治二テ、波声混雨

## 【詠出機会】

掲出歌の詠者の中で、源隆国は俊綱の実父頼通に深く信頼されてお

り（和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』第一部第十章、新典社、二〇〇八年）、俊綱は頼通を介して交誼を結んだかと推測される。隆国は「年たかうなりては、暑さをわびて、暇を申して、五月より八月までは、平等院一切経藏の南の山際に、南泉房という所に籠りゐられけり」（『宇治拾遺物語』）という逸話が残り、晩年に宇治に隠遁して宇治大納言と呼ばれた。皇后宮春秋歌合には、隆国は歌人として、俊綱は念人として参加するなど、盛儀歌合で同席した例が残る。永承五年祐子内親王家歌合をはじめ、永承年間には頼通の盛儀歌合が頻繁に催されていたが、当該歌のような複雑な題は詠まれていない。一方で、いわゆる和歌六人党は郊外にて歌合をひらき、属目の風景を四字題にして歌を詠んでいたとされ、こうした傾向は無題詩の流行と軌を一にしていることが指摘されている。実際に山荘などを訪れ、句題詩的な〈題〉ではなく、「——即時」——「言志」といった語を用いて私的な内容を詠む無題詩の方法は、叙景歌を中心に当代の歌人たちに大きな影響を与えたとされる。（上野理『後拾遺集前後』第一章四、笠間書院、一九七六年）。「伏見の会」と呼ばれた俊綱主催の歌会でも「水辺落花」（詞花集・春・二八・師賢）、「秋の花一つにあらざ」（為仲集・一八）をはじめ、四字題で詠まれた歌が残る。○カハナミノ 題には「波」としか記されないが、前掲した三首とも川の波を詠んでいる。この川は宇治川のこと、詠歌の場であった宇治殿を意識している。○オトニマギレテアメフレバ 「混雨」の題により、川波の音と雨音の区別がつかないことを詠む。唐詩の影響によって勅撰漢詩集以来、雨音はそれ自体を素材とするのではなく、「他の音と混同する」と比喩的に詠むことが漢詩・和歌ともに一般的であったとされている。日本漢詩における雨音の受容は、平安初期に一部の詩人によって用いられていたが、より広く普及するようになったのは十世紀後半であり、その詠法は（菅原道真を除けば）前述した比喩的用法であった。和歌においては『古今集』撰者時代に



「秋の夜のあめときこえて降りつるは風に散りつる紅葉なりけり」（寛平御時后宮歌合・九五）のように比喻的用法で詠まれているが、十世紀末になると「こひしくはゆめにも人を見るべきにまどうつ雨にめをさましつ」（高遠集・二六九「蕭蕭暗雨打窓声」）などのごとく、『千載佳句』『和漢朗詠集』などの影響によって白居易の詩を享受して歌が詠まれたと考えられる（三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』第一部Ⅱ、和泉書院、一九九九年）。雨音と波を共に詠む例は前掲した宇治殿での歌会の詠が残るが、波音に雨音が混じるという表現は「さみやみよのまのあめの水のおともけさよりまさるかもの川なみ」（為信集・八二）のように、和歌においては時代が下らなければ類例が見えない。○ヌレヌカギリハシラレザリケリ 「実際に濡れてみなければ、雨が降っているのかどうかかわからない」と、聴覚だけでは違いを判別できないという理屈によって一首を成立させる。「このはちるやどはききわくことぞなきしぐれするよしぐれせぬよも」（後拾遺集・冬・三八二「落葉如雨といふ心をよめる」頼実）は落葉と時雨の聴覚的類似を「聞き分けることができぬ」と詠み、「あさなあさなぬくしら玉と見ゆるかな千草のつゆもぬれぬかぎり」（祿子内親王家歌合・一三・小式部）は白玉と露が視覚的に似ていることをもって「実際に濡れてみなければ、どちらかわからない」と詠むなど、同時代に表現構造が類似した歌が多く残る。

【補説】上句では、音の類同性によって「川波の音に紛れて雨が降る」と詠むことで、題を満たす。下句では、雨に濡れなければ両者の違いがわからないと詠み、理知的な趣向で一首をまとめる。無題詩には句題詩のような〈題〉が無く、自己の境遇・体験・感情・思考といった作者の内面、あるいは、属目の自然や人事といった外界という〈場〉を詠作の対象とする（堀川貴司『詩のかたち・詩のこころ』第二部第二章、若草書房、二〇〇六年）。「ヌレヌカギリハ」と詠むことも、詠作主体が室内、すなわち宇治殿に在ることを意識したものである。当該歌と隆国歌は川音で雨音が聞こえないと詠み、範永歌と頼宗歌は雨の激しい様子を詠む。宇治川を詠み込んである点から、属目の

景を四字題にまとめた題詠であり、当時の詠歌活動に典型的な詠歌の〈場〉を意識した歌と考えられる。俊綱には他にも「ひさかたの月すみわたるがらしにしぐるるあめはもみぢなりけり」(新勅撰集・冬・三七二)「白河院御時、うへのをのことも月前落葉といへる心をよみ侍りけるに」といった雨音と落葉の混同を詠んだ歌が残る。

当該歌含む永承元年宇治殿歌会は、どのような経緯で行われたか判断としない。しかし、同題で詠んだ隆国は歌壇を支えるパトロンの存在であり、範永は六人党の筆頭と目される同時代の代表的な歌人であった。隆国は河原院の雅的交流を継承した西宮歌会を催行しており、そこでは【語釈】「ヌレヌカギリハ：」項に掲げた頼実歌のような後世に影響を及ぼした歌も詠まれた(久保木秀夫「和歌六人党と西宮歌会」『中古文学』六六、二〇〇〇年一〇月)。俊綱もまた、寛徳く永承期にかけて六人党の後援者であったと想定されており(高重久美『和歌六人党とその時代』、和泉書院、二〇〇五年二月)、当該歌が詠まれた宇治殿歌会も、当時隆盛していた官人階層の和歌活動の一つであったと推測される。

(穴井)

冬コロ高野二侍ケル僧ノ

モトヘコソテヲシテツカハシ

タリケレハ

ヨミ人シラス

336

サムカリシアラシハイマハヲトハカ□<sup>(リ歌)</sup>

ウレシサノミソ身ニハシミケル

【整定本文】

冬ゴロ、高野ニ侍リケル僧ノモトへ、コソデヲシテツカハシタリケレバ

ヨミ人シラズ

サムカリシアラシハイマハオトバカリウレシサノミゾ身ニハシミケル

【現代語訳】

冬頃に、高野におりました僧のところへ、小袖というかたちでお与えになったので（お返しに詠まれた歌）

よみ人しらず

寒さが身に凍みていた嵐は今音ばかり（であるよ）。（もらった小袖によつて）今はただ嬉しさがだけが我が身に沁みいることだ。

【他出】『新続古今集』雑下・二〇六六

冬ごろ高野に侍りける僧のもとへ、ふすまをつかはしたりければ

よみ人しらず

さむかりし嵐はいまはおとばかりうれしさのみぞ身にはしみける

【作者】よみ人しらず。未詳。

【語釈】○冬ゴロ、高野ニ侍リケル僧ノモトへ、コソデヲシテツカハシタリケレバ 高野は、空海によつて開かれ

た真言宗の総本山金剛峯寺が存する高野山のこと。出家者に小袖を与えることを詠んだ歌としては「あはればむとおもふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな」（金葉集・雑上・五九四「大原の行運聖人のもとへこそでつかはすとてよめる」仁覚）、「こよひこそあはれみあつき心ちしてあらしのおとをよそにききつれ」（山家集・九一六「ことのほかにあれさむかりけるころ、宮の法印、高野にこもらせ給ひて、この程のさむさはいかがとて、こそで給はせたりける又のあした申しける」）などが残り、特に後者は当該歌と状況・表現ともに近似する。冬に

小袖を与えることは寒冬を過ぐす僧たちの間で一般化していた風習と思しい。また、これらの例とは異なるが、僅かな恩恵という意味の「小袖一つの恩」〔沙石集 一ノ七〕という成句も存したようである。この成句が出てくるのは、貧しい僧が日吉社に参詣して祈願した際に、前世の徳が足りず、北谷の寒い房から南谷の暖かい房へと移すだけで精一杯であったという話なのだが、僧への僅かな恩恵を意味する表現に「小袖」を用いている。こうした成句からも「僧—小袖」には、おそらく前述した風習のような賜与に関わるイメージが形成されていたと考えられる。

なお、「ヨシテ」は使役的に動作の手段・方法を表すため、小袖に接続するのは不審。詠者を思いやる心情を「小袖」というかたちで与えた」の意か。あるいは「小袖を（人を）やって」か。歌意から、当該歌は小袖を与えられた僧がお礼として送ってきた歌と考えられる。また『新続古今集』では夜具の「ふすま」を贈ったことになっている。

○サムカリシ ただでさえ寒い高野山の冬が嵐によつてさらに寒くなることを意味するが、「シ」によつて贈られた小袖のおかげでそれが過去のものとなったことを示す。他例は「昨日までかくやおとのさむかりし朝けの風に冬やきぬらん」（沙玉集・四八七）以外にはほぼ見当たらない。○アラシハイマハオトバカリ 「イマハ」と詠むことで、嵐の寒さが解消されて今となつては音ばかりが聞こえるようになった、という状況を表す。山里に吹く嵐は「山里に住みにし日よりとふ人もいまはあらしの風ぞわびしき」（古今六帖・四二九）、「ひもくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしのおとばかりして」（後拾遺集・雑五・一四五・頼実）のように、人が訪れない状況とともに詠まれる。当該歌や前掲西行歌では先行する表現を踏まえ、山里に寂しさを添える嵐も小袖をもらったことによつて辛くなくなった、と感謝の意を示したと解する。『題林愚抄』一〇三三五番歌では「嵐にいまは」となっている。○ウレシサノミゾ身ニハシメケル 「シム」は、「さげばささちればちりぬと見し花もけふのほびぞ身にはしみける」（経信集・二二二）、「うれしさをおもひしるにもたきもののけぶりばかりも身にぞしみぬる」（四条宮

下野集・一七)のように、液体・気体などの外的刺激が内部に浸透する意。また、「うれしきはいかばかりかはおもふらんうきは身にしむものにぞありける」(詞花集・恋上・二二三・道信)のように心に感じ入るの意。小袖をもらう前は冬の寒さという外的刺激が身にしてみていたが、心遣いによって今は嬉しさばかりがしみじみと感じ入る、と贈られた前後で「シム」ものが変化している。さらに、「とりわきて心もしみてさえぞわたる衣河みにきたるけふしも」(山家集・一一三二)のように「沁む―凍む」を掛詞とする例があり、当該歌も掛詞と捉える。

【補説】結句「身にしむ」の掛詞によって、「し(過去)―嵐―寒かり」と「今は―音ばかり―嬉しさ」という小袖をいただく前後の文脈を形成し、寒さが身にしてみた過去と嬉しさが身にしてみる今を対比して贈り物への感謝の意を歌う。ことばの連関によって一首をまとめた趣向主義的な詠みぶりといえる。詠者も小袖の贈り主も未詳であるため、詠年次もわからない。詠歌状況が【語釈】「冬ゴロ」項に掲げた西行歌と似通っており、高野を拠点としていることから、当該歌の「僧」は学僧ではなく、いわゆる聖のような存在であったかと考えられる。(穴井)

<sup>(西歌)</sup> □( ) 哥合ニ海上眺望

ト □<sub>フ歌</sub> □事ヲ

源師光

337 アサナキニシホチ□ルカニイテニケリ

カモメニマカフオキノツリフネ

【整定本文】

西( ) 哥合ニ海上眺望ト□フ事ヲ

源師光

アサナギニシホチ□ルカニイデニケリカモメニマガフオキノツリブネ

【本文に関する注】初句「アサナキニ」の二字目「サ」、重書カ

【現代語訳】 西（ ） 歌合に「海上眺望」ということを 源師光

朝風（の頃合）に海原を遥か遠くまで漕ぎ出たのだなあ。鷗と見分けがつかない（ほど遠い）沖合にいる釣り舟であるよ。

【他出】『師光集』一一一番

海上眺望

あさなぎにしほぢはるかに出でにけりかもめにまがふおきのつり舟

【詠出機会】承安二年（一一七二） 二月一七日広田社歌合（判者俊成）「海上眺望」

四番 左

新大納言実国

まつらぶねみえゆくほどはそれながらただえやごゑのききぞたえぬる（六七）

右勝

師光

あさなぎのしほぢはるかにいでにけりかもめにまがふおきのつりぶね（六六）

左のまつらぶねみえゆくほどはそれながらえやごゑのききたえぬらんほど、こころほそくは侍るを、右の、

しほぢはるかにいでにけり、といへるすがたよろしくきこえて眺望のこころなほまされるにや侍らん、より  
て以右為勝

【作者】 源師光↓324 【作者】。

【語釈】○西（ ） 哥合 当歌は広田社歌合において詠まれたが、広田社は平安後期以降、「西宮」とも呼ばれた。神祇伯源顕仲が大治三年（一一二八）八月に広田社で披講奉納した歌合は「西宮歌合」と呼ばれる。337番歌が

詠まれた歌合も、その詠作が各家集に、「西宮歌合に、社頭雪を」（季経集・四二）、「敦頼入道西宮にて歌合し侍りしに、海上眺望の心を読める」（頼政集・六八三）等の詞書で収められており、「西宮歌合」として認識されていたと知られる。当歌詞書の冒頭部は、一字目が「西」と推定され、その下の二字分ほどは虫損により判読不能であるものの、「宮ノ」と書かれていた可能性が考えられる。広田社歌合は承安二年（一一七二）一二月に道因が結構した奉納歌合で、「社頭雪・海上眺望・述懐」の三題、各二九番からなる。藤原公通・同重家をはじめ、五十八人が作者となり、判者は俊成が勤めた。歌合本文が伝存する。○海上眺望 陸地から沖合に向かって海を見渡した際の光景を詠む。広田社は、現在の兵庫県西宮市前面の海浜を「御前浜」としたとされる（『摂津国風土記』逸文）。この歌題は、広田社から眺めた瀬戸内海の光景を念頭に置いて設題されたのだろう。実際に、この題の詠には、「芦屋の沖」「住吉の松」「武庫の海」「淡路島山」「奈古の海」「鳴尾の沖」「須磨の晴れ間」等、広田社周辺の歌枕や地名が多く詠み込まれた。なお、『万代集』には「保延元年内裏歌合に、海上眺望といふ事を」の詞書が見えるが（三三〇二、教長）、この内裏歌合については、他の作例が見出せない。また、『林葉集』には「すみよしにしほゆあみて侍りし時、海上眺望といふ事を」の詞書が見えるが、例が多くはない歌題である。○アサナギニ 「朝風」は、陸風から海風へと交替する朝方、海辺の風が一時止まる現象。朝風の状況の中を、朝風が発生する時分に、の意。「朝菜寸<sup>アサナギニ</sup>」 真梶<sup>マカデ</sup>榜出<sup>コキイデ</sup>而<sup>ミツツ</sup> 見乍<sup>ミツツ</sup>来<sup>マツ</sup>之<sup>ハラ</sup> 三津<sup>サミツ</sup>乃<sup>ノ</sup>松原<sup>マツハラ</sup> 浪越<sup>ナミゴシ</sup>似<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>見<sup>ミユ</sup>」（万葉集・卷七・一一八五）等、『万葉集』に多くの用例が見られるが、平安期の用例は少なく、『伊勢物語』第八一段に「塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここに寄らなむ」（かたゐおきな）が見えるものの、勅撰集の初出は『新勅撰集』に入る「あさなぎにさをさすよどの河をさも心とけてははるぞ見なるる」（春上・二一・好忠）である。俊恵に師光家歌合での作「あさなぎにのじまがおきをこぎゆけばさをなれたるあぢの村鳥」（林葉集・六五〇）があり、広田社歌合でも「あさなぎ

におまへのおきをこぎでてぞくもをばうみのものとしりぬる」(隆信)がある。なお、当歌の初句は、広田社歌合の本文では「あさなぎの」だが、『師光集』では「あさなきに」となっている。○シホヂ□ルカニ 底本は二句四字目が虫損により判読困難だが、歌合本文および『師光集』により、虫損箇所は「ハ」と推定され、「ハ」の二画目に当たる墨痕が残る。「潮路」は、本来は船が進む道の意だが、ここでは、「海上」と解してよいか。「潮路はるかに」の措辞の用例は、「朝霞塩路遥に立ちにけりおきのかたほの見えずなりゆく」(続詞花集・二一「霞隔行舟」隆縁)が早く、「わたのはらしほぢはるかにみわたせば雲と浪とはひとつなりけり」(千載集・羈旅・五三〇・頼輔)等、平安末期の詠に集中的に出現する。広田社歌合の同題歌、「なごのうみのしほぢはるかながむればくもたちまじるおきつしらなみ」(一〇九・二六番左・懷能)にも詠まれる。○カモメニマガフ 他に用例が見えない措辞。「かもめ」は『万葉集』の長歌に「海原波ウチハラハ 加万目立多都カマメタテタツ」(卷一・二・舒明天皇)と詠まれたのが早く、以後も用例は多くないものの、平安期を通して用例が確認できる。勅撰集の初出は、『後拾遺集』の「かもめこそよがれにけらしゐなるこやのいけ水うはごほりせり」(冬・四二〇・僧都長算)で、水辺の歌材として詠まれる他、「いのりくるかざまともふをあやなくもかもめさへだになみとみゆらむ」(土左日記・四五)のように白い物に見立てる詠み方が認められる。「紛ふ」は、「混じり合つて区別できない」意と、「別の物に見聞達える」意がある。ここでは後者の意と解し、舟が沖合遠くまで行つてしまったので、海辺に立つ作中主体の目には、まるで遙か沖の海面にたゆたう鷗のように見える状況を詠んだと考えた。○オキノツリブネ 当歌が用例として早い。広田社歌合の翌承安三年(一一七三)八月十五日に張行された三井寺新羅社歌合に、「からさきや志賀の浦わに月すめばはるかにうたふ沖のつりぶね」(四二・観宗)の詠が見える。勅撰集初出は『千載集』の「なにはがたしほぢはるかにみわたせば霞にうかぶおきのつり舟」(雑上・一〇四九「眺望」円玄)で、337番歌とは二句・五句が共通する



が、先後関係は不明である。

【補説】337歌に対し、判者俊成は「しほぢはるかにいでにけり、といへるすがたよろしくきこえて眺望のころなほまされるにや侍らん」と評して勝を与えた。早朝に遥か沖合まで航行して行った小さな釣り舟と、その背景をなす大海原とが作りなす映像が、題意にもかない、また、「世の中をなにしたとへむあさばらけこぎゆく舟のあとのしら浪（拾遺集・哀傷・一三二七・沙弥溝誓）にも通う心細い印象と縹渺感とを与える点を評価したものか。

なお、藤原実家に当歌とよく似た発想の、「むれみたるおきのかもめやあさなぎにこぎはなれたるあまのともぶね」（実家集・三四七）の作がある。「海上眺望」題歌群の一首で、広田社歌合のための詠であった可能性も考えられる。当歌合の「海上眺望」題歌では、他にも、「あさばらけあしやのおきをゆくふねのよそめはかものあるかとぞみる」（五九・公通）、「なごのうみにたつともみえぬをしがもやとほざかりゆくあまのともぶね」（七〇・実守）、「なみのうへにすだくとりかともゆるかなとほざかりゆくむろのともぶね」（九一・資隆）等、遥か沖合を航行する小舟を水鳥に喩える同様の発想の作が見える。

初句「朝風に」は三句「出でにけり」と呼応して、「釣舟」が海へと漕ぎ出した時刻を示すと解釈されるが、披講の際に初句が「あさなぎの」と詠じられた時には、作中主体が海辺から沖合を眺める刻限として受け取られた可能性も考えられよう。風が止んだ風の状態は、遠くまで見晴るかすことのできる、眺望には絶好の頃合いと言える。

（中村）

俊恵法師

338 クモノナミワケユクフネノキコエヌハ

アマノカ□□<sup>（う歌）</sup>ニコキヤツケツル

【整定本文】

俊恵法師

クモノナミワケユクフネノキコエヌハアマノカ□□ラニコギヤツケツル

【本文に関する注】三句「キコエヌハ」の「ヌ」、「ネ（子）」に重書カ

【現代語訳】

俊恵法師

（湧き立つ）雲という波を分けながら進む舟（の楫の音）が聞こえないのは、天の川の河原まで漕いで到り着いたのだろうか。

【詠出機会】承安二年（一一七二）一二月一七日広田社歌合「海上眺望」337 【語釈】「西（一）哥合」項

七番 左勝

僧俊恵

くものなみわけゆくふねのきえぬるはあまのかはらにこぎやつけつる（七一）

右

皇太后宮大夫俊成

わたのはらこぎはなれぬるふなちにはこころもえこそつながざりけれ（七二）

左歌、あまのかはらにこぎやつけつる、といへるこころ、かの張博望之到牛チヤウハクワンノキウ漢マン 泝シヨ十万里之濤シヨといふ

句のこころをとられて侍り、いとをかくこそ侍れ

右歌は又愚老の拙歌に侍るべし、さのみ判者の威をかりてとがをあらはさず侍らん神慮おそれあるべし、こ

ころつながれずといへるばかりは眺望の心さだめてすくなく侍らんかし、左歌のこころまことに万里のなみ

おもひやられてはるかにこそおほえ侍れ、よりに以左為勝

【作者】俊恵。源俊頼男。母は藤原敦隆女。永久元（一一一三）生。建久五（一一九四）以前に没。東大寺僧。久

安二（一一四六）三月顕輔家歌合をはじめ、当代の多くの和歌行事に参じた。京都白河の自房を歌林苑と名づけ、党派・階層を問わない和歌の場として開放した。ここでは歌合や月次歌会の他、人麿影供や十首歌会等が催された。その和歌観は弟子である鴨長明の著作『無名抄』に記される。勅撰集に八四首入集。家集『林葉集』がある。

また、『影供集』『歌撰合』『歌苑抄』を撰し（ともに散佚）、『俊恵が秘伝』もあつたという。《参考文献》築瀬一雄『俊恵研究』（加藤中道館、一九七七年）、加島吉春「俊恵の詠法」（『国文学研究』一三〇、二〇〇〇年三月）

【語釈】○クモノナミ 雲という波の意。雲を波に見立てた表現。「雲の波」の用例は、『万葉集』の「天海丹雲アマノウミノ波立ナミ 月船ツキフネ 星之林丹ホシノハヤシニ 榜隠所見コギカクルミユ」（巻七・一〇六八。拾遺集・四八八、古今六帖・二五一にも入る）が早い。空

に浮かぶ雲を波に喩え、天空を運行する月を舟に見立てる作は、その後も、「雲のなみしばしなかけそ天の川よわたる月の御船さすほど」（久安百首・一三八・公能）のように詠まれた。海上に湧く雲を波に喩えた例としては、「くものなみはるばるたかきうなばらにゆくかたもなきあまのつりぶね」（千穎集・八二・心細十首）が早く、大海原に湧く雲の間を小舟が進んで行く寄る辺ない状況を描く構想は<sup>338</sup>歌と共通する。なお、『詞花集』に入る、「ゆく人もあまのとわたる心ちして雲のなみちに月をみるかな」（雑上・二九七・忠盛）は「海路月」題歌で、天空の雲と月からなる情景を叙すのに用いられて来た「雲の波」の措辞を、発想を逆転させて、海上に湧く雲の表現として用いた作である。○ワケユクフネ 舟が障害となる何かを押し分けながら進む光景を描く作は、「みなれたるかもむらどりつらとてやわけゆくふねにたちもさわがぬ」（貧道集・六〇〇「水鳥夾船」等）に見える。「くものなみわけゆくふねはあきのよのあまのとわたる月にぞありける」（為忠家後度百首・三九七「雲間月」忠成カ）は、<sup>338</sup>歌と初二句が共通するものの、空行く月を舟に見立てる点で場面構想を異にしている。○キコエ又ハ 「あせきよりもる水のおとのきこえぬは冬きにければこほりすらしも」（好忠集・五四九）のように、「〜が聞こえないのは、

：だからだ」という表現パターンのは確認できるが、当歌では何が聞こえないのかが不明である。「沖合の雲の中に消えて行つた舟は天に到り着いたのか」とする構想を満たす三句の表現としては、歌合本文のように、「きえぬるは」とあるのが適切だが、校訂せず通釈を施した。歌合本文に従えば、「雲という波を分けて進む舟が（視界から）消えてしまったのは」と解釈できる。○アマノカ□ラ 五字目は虫損により判読不能だが、歌合本文により、「ハ」であつたと推定される。「天の河原」は「秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし」（古今集・秋上・一七三・読人不知）のように、「七夕」に寄せて天の川の河原の意で用いられる例がほとんどで、「かりくらししたなばたつめにやどからむあまのかはらに我はきにけり」（古今集・羈旅・四一八・業平）のように、河内国の歌枕（現在の大阪府枚方市禁野付近）を指す場合もあるが、当歌は前者の意で用いる。なお、【補説】参照。○コギヤツケツル 「漕いで到り着いたのか」の意。「漕ぎ着く」については322番歌参照。なお、遙か沖へと漕ぎ進み水平線近くの雲に隠れた舟が天空の岸に到達したかとする発想は、「くものなみひとつにみゆるおきのふねあまつきしにぞこぎかくれぬる」（実家集・三四八）にも見える。同歌は「海上眺望」題歌群の一首で、これも広田社歌合に提出するために詠まれた可能性がある。

【補説】広田社歌合において、判者俊成はこの歌に対し、「左歌、あまのかはらにこぎやつける、といへるころ、かの張博望之到牛漢 浜十万里之濤といふ句のころをとられて侍り、いとをかくこそ侍れ」と評し、勝とした。引用される「張博望が牛漢に到、十万里の濤に溯る」は大江澄明の対策文の一部で（本朝文粹）、当該箇所は『新撰朗詠集』雑「山水」に入る（四六〇）。博望侯となった張騫が十万里の波濤をさかのぼり、天の河の源を尋ねた故事を踏まえる。俊成は338番歌について、「海上の雲を分けるように進む小舟が視界から消えた」情景に、張騫の故事を趣向として重ね合わせ、「見えなくなったのは天の河に到り着いてしまったせいだろうか」と詠じ

て、スケールの大きな構図に漂渺感と心細い情感を加味した点を評価したと考えられる。

(中村)

安心法師

339

モシホヤクケフリタツラシミワタセ<sup>(八巻)</sup>□

ウスクモマカフアハチシマカナ

【整定本文】

安心法師

モシホヤクケブリタツラシミワタセバウスグモマガフアハヂシマカナ

【現代語訳】

安心法師

藻塩草を焼く煙が立っているらしい。見渡すと、薄く広がる雲なのか(煙なのか) 区別がつかなくなる、(そこに見えるか見えないか茫漠としている) 淡路島であるよ。

【詠出機会】 承安二年(一二七二) 二月一七日広田社歌合(判者俊成)「海上眺望」↓337【語釈】「西(一)哥合」項

廿四番(海上眺望) 左

邦輔

わたのはらなみぢはるかにゆくふねのややみるままにくもにきえぬる(一〇五)

右勝

安心

もしほやくけぶりたつらしみわたせばうすぐもまがふあはぢしまやま(一〇六)

左すがたは優に待めり、くもにきゆるころいまはあまりにめなれ侍りてとかく申しやりがたくぞなりにて

侍る

右この、うすぐもは、けぶりたつらしとおきて、うすぐもまがふといへるよろしくみえ侍り、以右勝と申すべし

【作者】安心法師。生没年出自ともに未詳。二条天皇が僧侶の笛を聴くことを所望した際に内裏に召されており（月詣集・八二三詞書）、保元三（一一五八）〜永萬元年（一一六五）の間には出家していた。広田社歌合に出詠することから（勝一負一持一）、同歌合催行時（一一七二）までは生存が確認できる。『月詣集』に二首、『言葉集』に一首歌が採られる。また、未詳私撰集断簡によつて藤原範兼家歌合に源頼政とともに参加したことが知られ、散逸私撰集『歌苑抄』断簡に「たかさこのをのへのさくらさきぬれはこすゑにかくるおきつしらなみ」の歌が安心詠として伝わる（歌書集成、古典ライブラリー）。ただし右掲歌は、『千載集』では賀茂成保歌として入集し、藤原公重『風情集』にも類歌が残るなど問題が存する（久保木秀夫『中古中世散逸歌集論』第一章第六節、青簡舎、二〇〇九年）。二条天皇周辺の人物や歌林苑に出入りしていた歌人らと交流があつたかと推察される。

【語釈】○モシホヤクケブリタツラシ 「藻塩」は海藻から採取する塩、また、海藻にかける海水のこと。海水を注いで塩分を含ませた海藻を焼いて水に溶かし、その上澄みを煮詰めて精製する。「らし」は推定の助動詞。「浦ちかくたつ秋ぎりほもしほやく煙とのみぞ見えわたりける」（後撰集・秋中・二七三）、「もしほやく煙になるるすまのあまは秋立つ霧もわかずやあるらん」（拾遺集・雑秋・一〇九六）のように藻塩を焼く煙を霧（霞）に見まがえると詠む。当該歌では「らし」を用いてることから、作中主体が薄雲を見ることで藻塩を焼く景を想像している。

○ミワタセバ 遠望・眺望の際に類繁に用いられる句形。「みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」（古今集・春上・五六・素性）。○ウスグモマガフ 海上の景を詠む際に「〜まがふ」を用いる歌としては「わたのはらこぎいでてみればひさかたのくもぬにまがふおきつしらなみ」（詞花集・雑下・三八二）「新院位におはしまし

し時、海上遠望といふことをよませ給けるによめる」忠通）が著名である。島から立つ煙と薄雲とが混じり合い、淡路島がまぎれてしまふ様子を詠む。薄雲が和歌に詠まれたのは「入日さすみねにたなびく薄雲はもの思ふ袖にいろやまがへる」（源氏物語・薄雲・光源氏）が早く、広田社歌合の折にも「うすぐものかかるなみちをみわたせばまだいろどらぬまじまなりけり」（六八・実綱）が詠まれており、平安後期ごろから叙景歌に用いられる。また、「はる霞たなびく山の松がうへにはあらすて白雲ぞたつ」（和歌式・七）、「しら雲のおりある山の唐錦かねてぞ秋の霧はたちける」（古今六帖・六三八）などのように、雲と霞・霧の取り合わせは古くから例が見える。○アハヂシマカナ 淡路島は瀬戸内海の島で、「わたつ海のかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路しま山」（古今集・雑上・九一一／新撰和歌・恋雑・二二五・結句「あはぢしまかな」）のように、もっぱら海上に浮かぶ島を山に見立てて「淡路島山」と詠む。他出は「淡路島山」とするが（『歌枕名寄』八七五〇番歌でも「淡路島山」）、『言葉集』は詠嘆の「かな」につくる。「淡路嶋アハヂシマ 松帆乃浦尔マツホノウラニ 朝名芸尔アサナギニ 玉藻苜管タマモカリツツ 暮菜寸二ユフナギニ 藻塩烧乍モシホヤキツツ」（万葉集・卷六・九三五）によって、淡路島、特に松帆の浦で藻塩を焼くことが詠まれるようになる。「はりまがた春の日よりになりにけりかすみこめたるあはぢしまやま」（忠盛集・一七五「春ごろ、はりまよりのほり給ひけるに、あはぢのおきのかすみたりければ」）は淡路島が霞に隠れる様子を実景として詠んだものであり、霞や霧に隠れる様子が詠まれるようになる。「わたのはらなみちたゆたふくもまよりほのみえわたるあはぢしまやま」（広田社歌合・六四・実房）なども同様の趣向である。なお、平安末期から鎌倉前期ごろの限られた時期に「あはのしま」と詠む例が集中して現れる。「淡」を強調することで茫漠たる淡路島の景色を表現しているのだが、「むこのうみをなぎたるあさにみわたせばまゆもみだれぬあはのしまやま」（広田社歌合・六一・実定）、「おきつなみたちあるほどぞしられるあはのしまやまみえみみえずみ」（同・七八・経盛）のように、広田社歌合において詠まれた歌が最も古い例で

ある。同時詠に実景を意識した視覚的表現が用いられている点を踏まえれば、当該歌の「淡」にも、煙と雲の中で見えるか見えないかぼんやりしている様子が含意するか。

【補説】「煙—雲—淡路島」はいずれも霞・霧とともに詠まれる景物であり、それらを互いに結びつけることで縁語的な連関を生み出している。俊成は当該歌を「けぶりたつらしとおきて、うすぐもまがふといへるよろしくみえ侍り」と、藻塩焼く煙が立っており、それが薄雲と一体となつていふことを想像する詠み方を評価する。藻塩の煙と薄雲が混じり合い、それによつて淡路島がまぎれてしまふと詠まれており、「らし」によつて島の様子を推測している。広田社歌合に詠まれた地名は広田社の岸から遠望できる地であること、広田社御前の岸からの眺望は神の視点から詠まれた可能性があることが指摘されており（安井重雄「道因勸進『住吉社歌合』『広田社歌合』の詠歌の性格」『和歌文学研究』九五、二〇〇七年十二月）、当該歌も瀬戸内海を対岸から眺める視点で詠まれている。詠作主体の視点からは煙と雲が渾然一体となつていふが、一首の構造は、上句によつて煙が立ち昇る景が想起され、下句に至つてそれが対岸からは混じつてみえていふ、と視点が転換するかたちになつていふ。

（穴井）

アマノハシタテヲミテ

為忠朝臣

340 タトフヘキカタコソナケレマツカエニ

ユキフリワタルアマノハシタテ

【整定本文】 アマノハシダテヲミテ

為忠朝臣

タトフベキカタコソナケレマツガエニユキフリワタルアマノハシダテ



【現代語訳】 天の橋立を見て

為忠朝臣

どうにも例えられない(ほどの美しさである)ことよ。(遙か遠くまで生えている)松の枝に雪が一面に降る天の橋立は。

【他出】『為忠家初度百首』七九五「眺望」

たとふべきかたこそなけれまつがえにゆきふりわたるあまのはしだて

○『後葉和歌集』雑一・四八二「丹後守に侍りける時、眺望のこころをよめる」為忠

たとふべきかたこそなけれ松がえに雪ふりわたるあまのはしだて

○『新続古今和歌集』雑上・一七四六「天橋立をみて」藤原為忠朝臣

たとふべきかたこそなけれ松が枝に夕ぎりわたるあまの橋立

【作者】藤原為忠↓297【作者】。

【語釈】○アマノハシダテヨミテ 『為忠家初度百首』では「眺望」の題詠とされ、『後葉集』でも「眺望のこころ」とする。当該歌詞書は実景を詠んだ歌であるかのように記しており不審(補説)。「天の橋立」は丹後国の歌

枕で、宮津湾北西岸から与謝の海を東西に分けて延びる巨大な砂嘴。その砂嘴に見渡す限りに松が生えており、「舟とめてみれどもあかず松風に浪よせかくる天のはしだて」(堀河百首・一四五五「海路」紀伊)のように浜辺と松を取り合わせた景観が歌われる。○タトフベキカタコソナケレ 「かた」は手段、方法のことで、「べし」は可能。「なし(なけれ)」をともなつて、「例えられない」ことを意味する。はやく「たとふべきかたこそなけれ世中をゆめも久しやさめぬかぎりは」(嘉言集・一七「この身夢のごとしといふ題を」)に例が見えるが、平安中期と後期で詠法に差異がある。嘉言歌や「たとふべきかたはけふこそなかりけれ昨日をだにもくらしてしかば」(和泉式

部集・五八九)などは、世の無常、我が身の頼りなさを詠む際に用いており、「世の中をなににたとへむあさばらけこぎゆく舟のあとのしら浪」(拾遺集・哀傷・一三二七・満誓)の初・二句に近い用法といえる。一方で平安後期になると、「たとふべき方こそなけれ天の河月すみわたる有明の空」(顕輔家歌合・成通・九)のように、叙景歌を詠む際に初・二句に置くフレームとして定着した。当該歌の後に詠まれた例ではあるが、広田社歌合において判者藤原俊成は「たとふべきかたこそなけれひろまへのはままつがえにふれるしらゆき」(五六「社頭雪」浄縁)を「とほしろし」と評し、下句と結びついて、白雪が降る雄大な景を例えることができないと詠む点を評価している。○マツガエニユキフリワタル 雪の白と松の緑のコントラストを詠む。松と雪とを取り合わせる際には「ゆきのうちにちとせかはらぬまつがえはひさしきころたれによすらん」(古今六帖・二二七六)、「あまた年雪はつめども我が宿の松のみどりぞかはらざりける」(和歌一字抄・七三三・為義)のように、雪が降り積もっても松の緑は変わらないと詠む例と、「あさまだき雪ふりきてぞ色かはるころものやまのまつのみどりは」(為忠家初度百首・四七九「松上雪」為盛)のように、叙景歌において松に降り積もる雪を詠む例とが存する。天の橋立と雪とともに詠む先行例は見当たらず、為忠の創意と思しい。「フリワタル」によって、雪が一面に降る様子と遙か向こうまで松が生えている様子を同時に想起させるとともに、詞書の改変によって実景としての天の橋立の松原の景色を彷彿とさせる。「渡る一橋」が縁語となっている。『新続古今集』が「夕ぎりわたる」とするのは、「ゆきふり／ゆふきり」の誤認だろう。

【補説】天の橋立の典型的な景物である松の緑と、白雪とともに詠むことによって色彩的な対比をつくり、それを「たとふべきかたこそなけれ」の定型表現によって賞美する。神代から由来のある地の常緑の松、そこに降り敷く雪の白色美は「とほしろし」というべき壮大な美的風体を詠んだ歌といえる。

他出の通り、当該歌は『為忠家初度百首』『眺望』題で詠まれた歌であるが、『言葉集』および『新続古今和歌集』では「天の橋立を見て」の実詠とされている。先行する私撰集の『後葉集』でも「眺望の心」とされている点から、実詠と解しうる詞書は撰者広言による改変か。大原（327～328）↓山里（329～330）↓比叡・三井寺（331）↓伯耆・桜山（332）↓山寺（333）↓齋院御所（334）↓宇治殿（335）↓高野（336）↓広田社（337～339）↓天の橋立（340）↓須磨（341）↓陸奥（342～343）↓大原カ（344～345）↓熊野（346～347）のように、327番歌以降、雑下部の巻軸歌まで地方ないし都の周縁で詠まれた歌が配列されている。当該歌を百首歌の詠として採録すると、洛外の場による配列構成の意図にそぐわないため、あたかも天の橋立を訪れた際の詠歌であるように詞書を記したと推測される。（穴井）

スマニテイツレカシホヤクト人ノ

タツネ侍ケレハ

有房

341 ヨト□モニタエスケフリノタ、ハコソ

ソラニシホヤクホトモシラレメ

【整定本文】

スマニテ、イズレカシホヤクト、人ノタツネ侍ケレバ

有房

ヨト□モニタエズケブリノタ、バコソソラニシホヤクホトモシラレメ

【現代語訳】

須磨にて、どちらで塩を焼くのかと、人が尋ねましたので

有房

もし絶えることなく煙が立つならば、(その煙が漂う) 空の様子によつて塩を焼いている程もおのずと分かるでしょうけれど。

【作者】源有房。天承元年(一一三二)頃の生まれか。没年未詳。村上源氏俊房流師行の子。ただし『尊卑分脈』には「為有仁公子」、尊経閣文庫蔵『帝皇系図』には「実有仁公子」と記される。但馬守、侍従、左少将などを経て、治承二年(一一七八)正四位下、養和元年(一一八一)左中将となる。二条天皇、後白河院に近侍するほか、撰関家の基房にも仕えた。一方で平家とも近しく、平忠盛女を室とした。中宮亮重家朝臣家歌合、別雷社歌合などをはじめ、経正・忠度・資盛など平家歌人の歌合にも参加している。『新勅撰集』に二首入集。そのほか『月詣集』『玄玉集』等にも歌が残る。自撰と見られる家集が二種存在する。なお、同じく村上源氏の神祇伯頭仲の子もまた源有房という名で、同時代に同名の歌人がいたことになる。『千載集』入集の有房は、この頭仲男の有房と推定されている。《参考文献》中村文『後白河院時代歌人伝の研究』第七章「源有房」(笠間書院、二〇〇五年)

【語釈】オスマニテ 須磨は摂津国の歌枕。古く須磨関があった。和歌においては「すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり」(古今集・恋四・七〇八・読人不知)、「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」(古今集・雑下・九六二「田むらの御時に事にあたりてつづくにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける」行平)、「すまのうらにやくしほがまのけぶりこそはるにしられぬかすみなりけれ」(詞花集・雑上・二七三・俊頼)のごとく、海人や藻塩、塩焼く煙などともに詠まれ、これらの景物を恋歌と関連させた例も多い。「すまのせき有明のそらになく千鳥かたぶく月はなれもかなしき」(千載集・冬歌・四二五・俊成)のように千鳥もよく詠まれた。在原行平、光源氏が退去した地としても著名で、貴公子の流謫の地というイメージも強い。当該歌詞書を解釈する際は、「須磨にて」が「いずれか塩焼く」か

「人のたづね侍」のどちらにかかると意味が変わってくる。前者なら「須磨のどちらで塩を焼いているのか」と人に尋ねられたことになるし、後者なら、須磨にいる折に人から「どちらで塩を焼いているのか」と尋ねられたことになる。ただいづれにせよ有房が須磨にいた折の詠であることに変わりはないだろう。○人 有房に尋ねてきた人。名前や性別など一切不明である。須磨の人なのか都にいる人なのかも不明だが、ひとまず後者で解釈した（詳細は【補説】参照）。他愛ないやりとりができることを鑑みると、有房とは親しい関係の人だったのであろう。

○ヨト□モニ 三字目が判読できないが、おそらく「ヨ」であろう。「よ」ともにして解釈した。「よ」ともに」は、この世にある限り、常に絶えることなく等の意で、時間的に継続している様を指す。『古今集』以降多く詠まれた。恋歌であれば「住の江の浪にはあらねどよ」ともに心を君によせわたるかな」（後撰集・恋二一六三八・貫之）のように恋しく思う時間や会えない時間の長さを詠み、賀の歌であれば「松をのみときはと思ふに世ともにながす泉もみどりなりけり」（拾遺集・賀・二九一・貫之）のように繁栄や寿命の長さを詠む。やがて「夜とともにたえずもおつる涙かな人はあはれもかけぬ袂に」（長秋詠藻・三五二）のように「よ」に「夜」を重ね、一晩中、夜になると、の意で用いる例も増加した。「煙」とともに詠んだ例もあるが、当該歌以前には五例ほどしかなく、その中に師行男の有房詠「よとともにたえぬおもひのけぶりかなわがみはふじのけぶりならねども」（有房集・三五五）がある。○タ、バコソ 「立つ」の未然形に接続助詞の「ば」が付いて順接の仮定条件を示し、さらに強意の「こそ」が付いたもの。実際には煙が立っていないことになる。結句「知られぬ」と併せて考えると、全体としては反実仮想のような意味になる。○ソラニ 天体の「空」だけでなく、「何とはなしに」「どこことなく」の意も含むか。

【補説】【作者】に記したとおり、この時代「源有房」という人物は二人存在した。当該歌の有房がどちらなのか

判断に迷うが、ひとまず師行男の有房として解した。理由は以下の通り。まず『言葉集』には、有房なる人物の詠が当該歌以外に四首あるが、そのうち三首が師行男有房の家集『有房集』所収歌である。『言葉集』の「有房」は全て同一人物と見てよいのではないか。ただし気に掛かるのは、当該歌以外の四例全ての作者表記に「朝臣」が付されている一方、当該歌のみ「朝臣」が付されていない点である。四位に至った師行男有房と、正五位下で終わった顕仲男有房との差異を表している可能性がある。だが『言葉集』の作者表記には揺れがある。例えば藤原隆信の詠五首のうち、四例(三・二二一・三三〇・三三〇)は「隆信朝臣」であるのに、一例(一一二八)は「隆信」である。源俊頼詠も三例(一五二・二六三・二二五)は「俊頼朝臣」であるのに、二例(一九四・二七二)は「俊頼」である。このような「朝臣」の有無は基俊や頼輔にも見られる。作者表記の「朝臣」の有無のみで別人と判断するのは、『言葉集』においては難しいのではないだろうか。また【語釈】「ヨト□モニ」で挙げた『有房集』三五五番歌と当該歌上の句とが極めて似通っているのも、両首の作者が同一だからではないだろうか。これらの理由から、当該歌の作者を師行男の有房と判断した。ただし顕仲男有房の可能性も完全には捨てきれない。

歌はおおよそその歌意はとれるものの、一首の趣向がどこにあるのか解しにくい。「人」が「いづれか塩焼く」と尋ねた真意や、有房詠の「煙立つ」等の表現が何かの暗喩であればその意味が分かりにくい、いくつか解釈の可能性を示しておく。一つ目は、都の人から手紙などで「須磨ではどこで塩焼きが行われていますか」と問われたものの、実際にはその様を見ていないため、「煙が漂えばそれも分かるのですが、実際には見えません」のような返しをした解釈である。当該歌の後には洛外に閑連し、かつ現実があるべき姿ではないこと、あるいは現実と地名とが異なることを趣向にした歌が並ぶ(342・馬を贈るという約束が果されていない。343・会おうと言われたのに実際には会えなかったことを「阿武隈川」に寄せて詠む。346、347・良い墨を期待したが実際にはなかった)。これらと

同一の趣向が当該歌にもあると想定すると、須磨といえは古くから藻塩を焼く地というイメージが強いが、実際にはその様子は見られなかったということを軸にしたやりとりが思い浮かぶ。二つ目は恋の含意を読み取る解釈である。初句「よとともに」の「よ」には「男女の仲（世）」を含み得るためか恋歌に多く詠まれる。【語釈】「ヨト□モニ」でも引用した有房詠「よとともにたえぬおもひのけぶりかなわがみはふじのけぶりならねども」（有房集・三五五）もそれに当たる。また「もしほやく海士のいそ屋のゆふけぶりたつなもくるしおもひたえなで」（古今集・恋二・一一一六「夕恋といふ事をよみ侍りける」藤原秀能）のように、恋の炎を塩焼きの煙に例えて詠む例も少なくない。細かな解釈は不明ではあるものの、当該歌にも何らかの恋の含意があり、都の人（女か）とのやりとりという可能性も存する。なお当該歌は「たちのぼるもしほのけぶりたえせねばそらにもしるきすまのうらかな」（後拾遺集・雑四・一〇五四・「すまのうらをよみ侍りける」経衡）（『経衡集』では初句「あまのやく」と通ずるところ）があり、この経衡詠を念頭に置いて詠まれたか。

（小林）

陸奥介基頼（朝歌）□臣馬ヲ

タハムトチキリ侍ケルカソノ

ノチヲトモセサリケ（夕歌）□□イヒ

ツカ（夕歌）□□ケル

基俊

342

アラタマノトシノイツトセマ（夕歌）□□ワヒテ

□□ヨモシラヌムマハノマシ

## 【整定本文】

陸奥介基頼朝臣、馬ヲタバムトチギリ侍ケルガ、ソノノチオトモセザリケレバ、イヒツカハシケル 基俊  
アラタマノトシノイツトセマチワビテ□□ヨモシラヌムマハタノマジ

## 【現代語訳】

陸奥介基頼朝臣が、馬をくださると約束しましたが、その後は便りもなかったので、言い遣わした 基俊  
五年の年月を待ちくたびれて「――」（残りの）寿命も（どれほどか）分からず、もう馬は当てにしません。

## 【他出】『基俊集』一四〇

みちの国のかみもとよりのあそん、むまえとせんといひて、にんややはてがたになりぬれどおともせざりしか  
ば

あら玉の年のいつとせ待ちわびぬわがよもしらずむまはたのまじ

## 【作者】基俊↓298 【作者】

【語釈】○陸奥介基頼朝臣 基頼は俊家の子で基俊の兄。長久元年（一〇四〇）生、保安三年（一一二二）没。康和五年（一一〇三）陸奥守従五位上、長治元年（一一〇四）鎮守府將軍、天仁元年（一一〇八）陸奥守重任、翌年正五位下。そのほか越前守、能登守、常陸介などを歴任、中務大輔に至る。『尊卑分脈』に「嗜弓馬好鷹犬、達武略、討出羽常陸井北国凶賊、蒙將軍宣旨」とあり、武略に秀でた武人であったらしい。後掲する『中右記』によると「陸奥守」とあるため、「介」は何らかの勘違いであろうか。○馬ヲタバム 古くから陸奥は良馬の産地として高名であった。基頼は基俊に対して、赴任先の陸奥から馬を贈ってやると約束したのであろう。○アラタマノ「年、月、春」などにかかる枕詞。当歌の初句から三句にかけては、『伊勢物語』第二十四段の女の歌「あらたまの



年の三年を待ちわびてただ今宵こそにひまぐらすれ(五二)と極めて近い。○マチワビテ 『基俊集』では「まぢわびぬ」と三句切れになっており、『言葉集』より素つ気ない印象を受ける。○□□ヨモシラヌ 二字分判読が難しいが、他出『基俊集』により「ワカ」とあったと推測される。「私の残りの寿命の程も分かりません」の意であろう。類例としては、「たれがよもわがよもしらぬよのなかにまつほどいかがあらむとすらん」(後拾遺集・別・四七〇「ひとのとほきところにまかれりけるに」道信)、「日もくれぬことは今日をかぎりにてあはれ我がよもしらぬものゆゑ」(拾遺愚草員外・七〇)など。あるいは「よにしらず(世に類例がないほど優れている)」を掛けて、「立派な馬はもう頼みにしますまい」の意も含ませているか。

【補説】当歌は『基俊集』一四〇番にも収載されるが、その詞書に「任やや果てがたになりぬれど」とあるため、基頼の任期が終わる頃の詠と推察される。『中右記』長治元年五月二日条に「鎮守府將軍藤原基頼、(兼、去春除目任陸奥守也)」、天仁元年十二月三十日条に「陸奥守基頼蒙重任宣旨也」とある通り、基頼は陸奥守に二度任じられている。当歌に「五年待ちわびて」とあるため二期目の任期終盤の詠かとも読めるが、守として陸奥に下る以前に約束していたとすれば、初度の任期終盤時点で五年待っていたと換算することもできる。どちらの任期の終わりの頃か断定し難いが、いずれにせよ天仁元年頃から数年以内の詠と見てよからう。基俊の生年は諸説あるが、当歌の詠歌時点でおおよそ五十歳前後から五十代半ばであろう。「我が世もしらぬ」という詠みぶりは年齢的にも妥当かと考えられる。陸奥は馬の名産地であるため、基頼は弟の基俊に任国の名馬を贈ってやる約束をしたのである。しかしその後の音沙汰もないため、やがてしびれを切らした基俊が、拗ねてみせた一首を催促の意味を込めて基頼に贈ったのである。【語釈】で示した通り、上の句全体は『伊勢物語』第二十四段の歌を踏まえていよう。いわゆる「梓弓」の章段で、都に上った男と田舎に残った女との話である。都と鄙との往還が核となっている点は、

都と陸奥との贈答である当歌と通じ合う。基俊がこの『伊勢物語』所収歌を撰取したのはそのためと考えられる。基俊と言えば、「百人一首」にも収載される「契りおきしさせもが露をいのちにてあはれことしの秋もいぬめり」（千載集・雑上・一〇二六）の歌が広く知られるが、これもまた当歌と同じく果たされない約束を嘆き訴える歌である点は興味深い。

（小林）

陸奥<sup>(御馬歌)</sup>□□使□□下向シテ侍

□□<sup>(ケル歌)</sup>ニ□□<sup>(清歌)</sup>衡アフ□□<sup>(へ歌)</sup>ヨシ申

ナカラヒサシクアハサリケレハ

ステニノホリナムトスルヨシ

申ツカハシテヨミ侍ケル

秦兼久

343 ヲトニノミキ、テソカヘルミチノクノ

ア□□<sup>(フ歌)</sup>クマカハ、ナノミナリケリ

【整定本文】

陸奥御馬使ニ下向シテ侍ケルニ、清衡アフベ□□ヨシ申ナガラヒサシクアハザリケレバ、ステニノボリナムトスルヨシ申ツカハシテ、ヨミ侍ケル

秦兼久

オトニノミキ、テゾカヘルミチノクノアブクマガハ、ナノミナリケリ

【本文に関する注】 詞書十字目「テ」、三十四字目「リ」は重書。

【現代語訳】

陸奥御馬使として下向しました時に、清衡がきつと会おうということをお申しながら、いつまでも会わなかった  
ので、すでに上ってしまおうとすることを申し送って、詠みました  
秦兼久

(阿武隈川という名所のこととは知っていたが) 噂(あなたの言葉) だけ聞いて帰るよ。陸奥の阿武隈川の「会ふ」というのは名前だけである(ように、あなたの約束も口だけである) ことよ。

【作者】 生没年未詳。応徳三年(一〇八六)～元永二年(一一一九)の間に活動していたことが確認できる。左近将曹兼方男。平安後期の秦氏は近衛府に属した下級武官であり、『古今著聞集』「馬芸」には秦氏が馬芸に優れていたとする説話が残る。兼久は右近府生であった(勅撰作者部類)では「左府生」。また、兼方―兼久―兼弘(広)と三代に渡り神楽人長を務めた楽人の家柄でもあった。自身は白河院御隨身、息兼広は藤原忠実・忠通の随身を務めた。父兼方は『言葉集』に一首入集する歌人で、『袋草紙』等に『後拾遺集』撰集をめぐる逸話を残す(『宇治拾遺物語』が兼久とするのは誤り)。兼久も『言葉集』に一首入集する。《参考文献》 杉崎重遠「秦兼久」(『王朝歌人伝の研究』新典社、一九八六年)

【語釈】 ○陸奥御馬使 陸奥国には貢馬を育てる牧が多く存し、平安中期には望月牧とともに駒牽の馬が貢進されていた。特に陸奥国の馬は、「陸奥交易馬」として、名馬を買い上げて都に進上されていた(高橋富雄東北学論集7『地方からの日本学』歴史春秋社 二〇〇八年)。はやく「みちのくのをぶちのこまものがふにはあれこそまされなつくものかは」(後撰集・雑四・一二五二)と詠まれており、野飼された陸奥産の馬が荒々しさの比喻に用いられている。時代は下るが、源頼朝が「陸奥より勢大きにしてたけき悪馬」(『古今著聞集』三六四)を献上されたという説話も残っており、陸奥馬の精強さが知られる。陸奥交易馬使御馬使には院近習が派遣されていたと思しく、兼久

も院随身の衛府生として派遣されたと考えられる〔補説〕。○清衡アフベ□ 奥州藤原氏の祖である藤原清衡。源義家の力によって後三年の役に勝利し、義家が没した後に奥羽一帯を支配した。清衡は藤原師実に貢馬し、その後も摂関家に馬を贈り続けていた。陸奥交易馬を含め、奥州における貢馬を管理していたと考えられる〔補説〕。「アフベ」下の一字が虫損により判読できないが、残画・文脈によって「キ」と推測する。○オト二ノミキ、テゾカヘル 「音に聞く」は、噂や知識などの情報のみを聞き知っている状態の成語。名所とともに用いられる際は、「おとにのみきき渡りつる住吉の松のちとせをけふ見つるかな」（拾遺集・雑上・四五六・貫之）などのように、知識としての地名と実際の土地の様子を結びつけて詠まれる。当該歌の「音」は便りの意も含んでおり、「会おう」と言ってきた清衡の言葉だけ聞いて帰ったことを詠んでいる。○アブクマガハ 阿武隈は陸奥の歌枕。現在の福島県白河市の西、旭岳に源を發し、阿武隈山地を北に流れる川までの一帯。「あぶくまに霧立ちくもりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし」（古今集・東歌・一〇八七「陸奥歌」）に詠まれたのが早い例。「ぬれ衣といふにつけてやながれけんあぶくま川の名こそ惜しけれ」（堀河百首・一三八八「川」永縁）、「きみがよにあぶくま河のそこきよみよをかさねてすまんとぞおもふ」（金葉集・賀・三一・頼通）のように「阿武隈―逢ふ（会ふ）」の掛詞を詠む作例が多い。○ナノミナリケリ 「大井河うかべる舟のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり」（後撰集・雑三・一三三二・業平）のように、しばしば名所とともに用いられ、地名の持つイメージが「名前だけであった」ことを詠む。当該歌では「阿武隈―会ふ」という語の連想を踏まえ、「会うことができなかつた」ことを意味する。

【補説】「音にのみ聞き―阿武隈川―名のみなりけり」と、名所とともに詠まれる表現を用いて一首を構成し、「阿武隈―会ふ」という地名のイメージもむなしく会えなかつたことを責める内容になっている。

秦氏は東漢氏と並ぶ渡来系氏族で大和政權下に活躍した一族であったが、平安中後期ごろには下級武官として定着していた。『殿曆』天仁二年九月六日条には白河院が高陽院に御幸した際に行われた競馬の記事が残っており、その競馬には兼方・兼久・兼弘三代が揃って参加していた。息兼弘は馬術の「ならびなき上手」（『古今著聞集』三五八）であったとされる。

貢馬については、奥州藤原氏の基衡・秀衡によって摂関家を中心に馬が貢納されていたことがわかっている（高橋富雄『奥州藤原氏』吉川弘文館、一九九三年）。さらに、前述した高陽院での競馬には陸奥産の馬も使用されており、清衡は同時期に陸奥交易馬や摂関家への貢馬を手配していた。これらの事例を勘案するならば、馬術に通じていた兼久が衛府官人として陸奥交易馬貢進のために、御馬使として派遣された。その際、在地の有力な武士たる清衡と面会の約束を交わすも、それを果たせぬまま帰京した、という詠歌状況が想定されよう。兼久の例ではないもの、『中右記』保安元年二月三日条に左近府生下野毛敦利が御馬使として下向する記事が残る。この時、敦利が任じられたのは二度目であったが、それは白河院の寵愛によるとされており、院の寵愛如何によって御馬使が定められたと考えられよう。とすると、下級武官とはいえ院の寵を得た人物が派遣されているのだが、清衡は「きつと会おう」と言いながらそれを反故にしたということになる。

不審な振る舞いと言わざるを得ないが、それには清衡が摂関家と強く結びついていたことが関係するのではない。奥羽には摂関家領の庄園が多く、後三年の合戦以後の清衡は摂関家との関係構築を図っていた。そして、前述した貢馬のこともあって、摂関家と関係を結ぶことに成功していた。一方、兼久の活動が確認できるのは白河院政が確立しようとしていた時期であったが、その下限にあたる元永―保安年間は白河院と忠実との間には緊張が走っていた。兼久が陸奥に下向した時期は不明だが、仮に敦利が御馬使に任じられた保安元年前後とするならば、

陸奥国においても政治的緊張が高まっていたであろうと想像される。白河院の使である兼久に「アフベキ」と言いながら遂に面会しなかった背景には、清衡の摂関家に対する配慮があったとは考えられないだろうか。

なお、兼久の詠歌傾向については、「おなじくはととのへてふけあやめぐささみだれたらばもりもこそすれ」（金葉集・夏・一三三）「五月五日に家にあやめふくをみてよめる」にも、「五月雨―さ乱れ」の掛詞、「整へ―乱れ」の対比といった技巧が見え、言葉の連関を重視した詠みぶりが看取される。兼久歌は二首しか現存しないが、実事（実景）を題材にした理知的な趣向の歌を詠むことを得意とした歌人であったか。（穴井）

脩範卿ノ許ニ顕昭法師マ

ウテキテ連哥シアカシテ

カヘリケルニケサヲワスレタルヲ

カヘシツカハストテ

左京大夫脩範

344 ナコリヲハヨスカラコソハナカメツ□

ケサヲワスル、人モアリケリ

【整定本文】

脩範卿ノ許ニ顕昭法師マウデキテ、連哥シアカシテカヘリケルニ、ケサヲワスレタルヲ、カヘシツカハストテ

左京大夫脩範

ナゴリヲバヨスガラコソハナガメツ□ケサヲワスル、人モアリケリ

【現代語訳】 脩範卿の許に顕昭法師が参つて、一晚中連歌をして帰つたが、袈裟を忘れていたのを（顕昭に）返し

遣るといふので

左京大夫脩範

（私の方は、あなたと連歌して愉しく過こした時間の）余韻を（お別れする前から深く味わい）一晚中ずっと物思いに耽っていましたよ。（別れて帰って行く）今朝（の名残惜しさ）を忘れてしまう（そんな薄情な）人もいたことですよ。（お坊さんなのに）袈裟を忘れる人もいたなんてね（大事な袈裟をお返ししますよ）。

【他出】『新続古今集』雑下・誹諧歌・二〇七一

法橋顕昭まうできてあしたに帰るとて、袈裟をわすれたりけるをかへしつかはずとて

左京大夫脩範

名残をば夜すがらこそはながめつれけさをわするる人も有りけり

（『題林愚抄』一〇二四〇では五句「人に有りけり」）

【作者】 藤原脩範 ↓311番歌 【作者】

【語釈】○顕昭法師 ↓299番歌 【作者】。顕昭と脩範の交流は、『袖中抄』に、「私云、先年二民部卿成範卿左京大

夫脩範卿ナトニイサナハレテ西山ノ寺メクリシハヘリシニ遍照寺ニマウテ、侍シカハ」と見え（「シノフモチスリ」項。引用は、『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文学篇第十四卷歌学書三』臨川書店、一九九九年による）、

風雅面での親密な交遊関係が確認できる。信西の子息たちと六条家歌人の間には、この他にも和歌を介した交流が認められる。中村文『後白河院時代歌人伝の研究』第五章（笠間書院、二〇〇五年）参照。○連哥シアカシテ

「連歌」は五七五の句と七七の句とを交互に重ね詠む形態の文芸。歌を詠む者同士が邂逅した際に連歌を楽しみ合った例は、「こじじゆうにはじめてたいめんして、よもすがられんがなどしあかして、かへるとて」（殷富門

院大輔集・一五九)のように、特に平安末期の私家集に散見される。「シアカシテ」は夜が明けるまでである行為を続ける意。前掲『大輔集』でも、「よもすがられんがなどしあかして」と見え、同好の士と同座した場合、夜通し句を作り続けるほど熱中したことがうかがえる。当歌を収載する『新続古今集』の詞書には、「法橋顕昭まうできてあしたに帰るとて、袈裟をわすれたりけるをかへしつかはすとて」とあるのみで、両人が連歌を楽しんだことが記されない。344番歌詞書により、脩範と顕昭との風雅面での結びつきに関連した贈答歌であることが確認できる。

なお、平安末期の私家集には、「和歌所に人人集りて夜もすがら歌読み連歌などしてあそばれ侍りしに」(頼政集・六五九)、「女房大輔にはじめてあひて、うたよみ連歌などして、あくるあしたにつかはしける」(忠度集・八三)、「上西門院にて、わかき殿上の人人、兵衛のつばねにあひ申して、武者のことにまぎれてうたおもひいづる人なしとて、月のころうたよみ連歌つづけなむどせられけるに」(聞書集・二二八)、「北白河なる所にて、唯心房、西行などさそはれしかば、まかりて歌よみ、連歌などせしに、上西門院の兵衛ときこえしふる人おはしあひて」(隆信集・七九四)、「ある人のもとにまかりて、夜もすがら歌よみ連歌などして」(隆信集・八三八)のように、和歌と連歌の両方を楽しんだ例が少なからず見出せる。その多くの場合において、和歌や連歌が同座した人々の間に文学的な感興を喚び、相互の親密さを増幅させる機能を持ったことがうかがえる。○ケサ 「今朝」に、僧がその標識として着用する法衣である「袈裟」を掛ける。○ナゴリ 物事が過ぎ去った後に残る余韻。ここでは、顕昭と連歌を交わして味わった愉しさを名残惜しく感じる気分。○オスガラ 「夜もすがら」に同じ。夜の問じゅう。一晚中ずっと。○ナガメツ□ 三句五字目は虫損により判読不能だが、『新続古今集』所載の同歌により、「レ」と推定される。「名残をながむ」の表現は、「いかばかりあきのなごりをながめましけさはこのはに嵐ふかずは」(千載集・冬・三八八・俊頼)のように、過ぎ去った事象の余韻を味わいつつその面影を光景に見出そうと眺める意で用いら



れるが、「あり明の月見すひまにおきていにし人のなごりをながめしものを」（千載集・恋五・九〇七・和泉式部）のように、一夜を共にした恋人が帰って行つた後で、逢瀬の余韻に浸りつつ物思いにふける情景を表す例もある。344番歌は後者の例と解した。○ケサヲワスル、『月詣集』八一二番詞書に、「成全阿闍梨の房に祐盛法師まかりて、よもすがら物語してつとめてかへりはべりけるに、けさをわすれたりければよみてつかはしける」と、類似する状況が見える。その詠、「たのまじなよのまのほどにひきかへてけさは忘るる人の心を」（成全法師）の下旬は、夜の間の情熱的な態度とはうって変わりに朝にはすっかり冷淡になつた恋人に、相手（祐盛）を擬えて、「今朝は忘るる人の心」と表現している。344番歌においても同様に、「ケサ」に「今朝・袈裟」を掛け、「私の方は愉しかつた昨晚の名残を惜しんで物思いをしているのに、あなたは（二人が別れた）今朝の名残惜しさをすっかり忘れたのか」と詰つてみせる身振りに重ねて、「僧の装束として重要な袈裟を忘れたとは」と、本来の用件である忘れ物について、大仰に呆れてみせたのである。○人モアリケリ 「けり」に「そんな大切なことを忘れる人もあつたものですよ」という慨嘆を籠める。

【補説】「名残―夜すがら―ながめ―忘る」の語を連ねて、一夜を共にした男女が起きて別れ行く際の名残惜しい気分を想起させる一首としている。一晚中、連歌をして楽しんだことを、男女の恋愛関係に擬え、男性を見送る女性に身を為して詠んでいる。自分の方は二人の愉楽の余韻にまだ浸っているのに、相手の方は別れた今朝の名残惜しさもすっかり忘れていると述べて、薄情な男性の姿勢を語る女性を言語表現により巧みに演じている。【語釈】「ケサヲワスル、」項に掲げた成全歌でも同様の手法が用いられている。戯れた応酬であり、脩範と顕昭との親密さがうかがわせるが、共に連歌に熱中する時間を共有したからこそその高揚感が、こうした言語上の演技を支えているのだろう。『残集』には、常盤に居た寂念の許に静空・寂昭らが集まり連歌したことが記されるが、詞書に「あ

きのことにてはださむかりければ、寂然まできてせなかをあはせてゐて、連歌にしけり」と見え（一四）、連歌という文芸が、同座する人々の間により親密な感情を醸し出す性格を帯びていたことを推測させる。（中村）

□□<sup>(事歌)</sup>

顕昭法師

345 ワレハイ□□<sup>(中歌)</sup>サワスルトモオホエ□□<sup>(又歌)</sup>ヲ

カヘスハヨルノ衣ナルヘシ

【整定本文】

□事

顕昭法師

ワレハイサ□サワスルトモオボエヌヲカヘスハヨルノ衣ナルベシ

【現代語訳】

□事

顕昭法師

私はさあ、今朝の名残惜しさを忘れるほど薄情だとも思わないし、袈裟を忘れたとも記憶がないのだが、（あなたは「袈裟を返す」と言つて来たけれど）返すと言つたら（袈裟などではなく、恋しい相手に夢で逢うためのおまじないだと言う）夜の衣なのでしょう。（私が「夜の衣」を返して、またあなたと逢えるように祈りますよ）

【他出】『新統古今集』雑下・誹諧歌・二〇七二

返し

法橋顕昭

我はいさけさわするともおほえぬにかへすは夜の衣なるべし

【作者】顕昭 ↓299 番歌 【作者】

【語釈】○□事

一字目は虫損により判読不能だが、「返」と推定される。○イサ

「いさ」は「知らず」など否

定表現を伴い、「さあ、知らない」の意で用いられることが多い。ここでは「おほえぬ」に続き、贈歌で「今朝の

名残惜しさも忘れてしまったのか」と薄情さを詰られたのに対し、「私は、さあ身に覚えがない」と空とぼけて追及を躲そうとする身ぶりを示してみせる。○□サワスルトモ 二句一字目は虫損により判読不能だが、他出資料により「ケ」と推定される。贈歌で「ケサヲワスル、人」と非難されたのを受ける。「今朝」に「袈裟」を掛ける。

○オボエヌヲ 「を」は逆接の接続助詞。記憶がないのだけれど。○カヘス 「袈裟を」返却する」意に、「夜の衣を」裏返す」意を掛ける。○ヨルノ衣 「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」（古今集・恋二・五五四・小野小町）とあるごとく、平安期には、夜着を裏返して寝ると恋しい相手と夢の中で逢えると俗信があったらしい。平安末期にも、この俗信に拠った、「夜とともにかへしてきつるから衣いくよといふにしろしみつらん」（清輔集・二・二六三「夢会恋」）等の例がある。

【補説】女に身を為した脩範から、薄情さを責める歌を贈られたのを受けて、その非難は身に覚えがないと受け流した上で、私の方もあなたと過ごした時間を忘れ難く思っているのだと返した。袈裟を返却してきた脩範に対し、「返す」と言ったら、それは袈裟ではなく夜の衣のはずだ」と述べて、その夜の衣は私の方こそ返して、あなたの夢を見ようと思っているのだ、あなたと連歌して過ごした一夜の感興はいつまでも忘れることはできないと伝える。一組の贈答の中で、脩範と顕昭は恋愛関係にある男女を和歌を通して演じていたのであり、お互いにその消息をよく了解して楽しんでる。親しい者同士が言葉を用いて戯れ合う巧みな応酬であったがゆえに、『新続古今集』の雑下部「誹諧歌」に撰入されたのであろう。

（中村）

通清クマノヨリ下向し

タリトキ、テヨキスミヤアルト

タツネタルヲカヘリ事ニスミノ

ワロキヨシ申テ

源通清

346

マツカセ<sup>(フ)</sup>□□トノミカヨフ、チシロラ

スミ<sup>(ヨシ)</sup>□□□□<sup>(フ)</sup>キミカイフナル

【整定本文】

通清クマノヨリ下向シタリトキ、テ、ヨキスマヤアルトタツネタルヲ、カヘリ事ニスミノワロキヨシ申テ

源通清

マツカゼノ□□トノミカヨフ、ヂシロラスミヨシ□□ノミキミガイフナル

【現代語訳】

通清が熊野より下向したと聞いて、上等な墨はあるかと尋ね求めたところ、返事に墨は良くないことを申して

源通清

松の間を吹き通う風の音のみが似通う藤代の地を、住吉すなわち墨の良い所だとあなたは言うようですね。(私がいたのは「すみよし」ではありませんから、墨の良いものではありません。)

【作者】源通清。醍醐源氏。正四位下齋宮頭清雅の子。『勅撰作者部類』には「五位藏人」「治承四年二月一三日補藏人五十八」とあり、これを信ずれば保安四年(一一二三)生まれとなる。『山槐記』治承四年(一一八〇)二月二十一日条によると、高倉天皇の讓位に伴って判官代に補された。住吉社歌合、広田社歌合に出詠。『夫木抄』によると仁安二年(一一六七)二月の歌林苑歌合にも出詠しており、歌林苑に出入りしていたようである。『続詞花

集』一二九番には、永暦元年（一一六〇）の藤原公教の死を悼む一首が入集。また『宇治拾遺物語』一九〇「土佐判官代通清、人違して関白殿にあひ奉る事」には、藤原実定に花見に誘われた後の失敗談が載る。閑院流と何らかの繋がりがあったか。『千載集』『新続古今集』に各一首入集。《参考文献》松野陽一「鳥帯 千載集時代和歌の研究」〈余滴〉（二ア）言葉集〈惟宗広言撰〉について（風間書房、一九九五年）、中村文『後白河院時代歌人伝の研究』第十章「源季広」（笠間書院、二〇〇五年）

【語釈】○クマノヨリ下向シタリ 熊野参詣から帰洛した折の贈答であることが分かる。熊野権現への参詣は宇多・花山法皇の頃から見られたが、院政期以降は特に盛んになった。白河、鳥羽、後白河、後鳥羽上皇らは大規模な参詣を度々実行し、それらには多くの廷臣が付き従った。○ヨキスミヤル 贈答相手の朝宗が通清に、上等な墨はあったかと尋ね求めたのである。当時の墨は松煙を原料としており、山深く松の生い茂る地は墨の産地に適していた。熊野参詣の宿泊地となっていた藤代（藤白）は良質な墨の生産地であつたらしく、紀伊の藤代墨は近江の武佐墨とともに著名であつた（綿谷正之「墨の文化史 概説」〔奈良保育学院研究紀要〕一六、二〇一四年）。『古今著聞集』巻第三（公事第四）には藤代滞在中の後白河院に、国司が上等な墨を献上した話が載る。○マツカゼノ□トノミカヨフ 二句一字目は虫損により判読不能だが、「ヲ」と推定される。「音のみ通ふ」として解釈した。「かよふ」には、共通性がある、似通うの意に加え、「風が吹き通ふ」の意も掛けているか。住吉は松とともに詠まれることが多く、松風との組み合わせも少なくない。例えば、「ながらへむ世にもわすれじすみよしのきしになみだつ秋のまつかぜ」（伊勢大輔集・七八）、「住吉のきしの松風渡るなりほそえのみぎはつららぬらん」（出観集・六二三）、「萩が枝に松風かよふすみよしのとほ里をのの夕霧のそら」（正治初度百首・一〇二六・慈円）などがある。そのような住吉と、藤代は松風の音だけは共通していることを示している。なお藤代には実際に松が生育

していたらしく、後掲するように藤代の松を詠んだ歌がいくつか残っている。墨の原材料である松煙をも意識して「松風」という語を用いたのかもしれない。また、「音」には「噂になる、評判になる」の意もあるため、藤代が墨の産地として評判であることも含意し、「あなたは藤代を良い墨の地と言うようですが、実際には評判だけでしたよ」のような文脈も読み取り得るか。○、ヂシロ 藤代は紀伊国の歌枕で、現在の和歌山県海南市藤白。藤代王子が祀られ、熊野参詣の折はここに宿泊するのが常であった。『明月記』建仁元年（一一〇一）十月九日条等によると、後鳥羽院も当地に滞在し、歌会を催行している。藤代峠を越える際の藤代坂は参詣道の難所であったが、その分すぐれた眺望であつたらしく、「ふぢしろのみさかをこえて見わたせばかすみやらぬ吹上の浜」（続後撰集・羈旅歌・一三二五・僧正行意）などの歌が残る。藤代の松を詠んだ例としては、「ひとしほのみどりのほかも色やそふ花さく春の藤しろの松」（安嘉門院四条五百首・二四）、「藤しろのみさかの松の木のみより夕日にみゆるあはぢ島山」（新千載集・雑中・一八九三・前大納言公蔭）などが存する。また平安時代の名画工・巨瀬金岡が熊野権現の化身である童子と絵の出来を競つて敗れた際、その筆を松の根元に捨てたという筆捨松の伝説も残る。先述した『古今著聞集』所収の逸話からすると、後白河院の時代には既に藤代にて良質な墨が生産されていたと思しい。や時代は下るが、「逢ふ事をまつにかけたるふぢしろの墨の名しるさかちの玉章」（為重集・一六六）のような歌も残る。なお言語遊戯的に、「ふじしろ」から白を想起させ、墨（黒）との対比も念頭にあつたかもしれない。○スミヨシ□ノミ 五字目が虫損により判読できないが、「ト」であろうか。「すみよし」は難波の歌枕「住吉」と良質な墨の意の「墨良し」との掛詞。あるいは住みやすい土地という意の「住み良し」も響かせているか。○イフナル「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形。

【補説】松野陽一は当贈答を、通清が後白河院の熊野御幸の一行に加わり、朝宗が都に残った折の詠である可能

性を示す（【作者】《参考文献》松野論文）。通清の父清雅には後白河院に奉仕した形跡があることに加え（【作者】《参考文献》中村論文）、【語釈】「ヨキスミヤアル」で引用した『古今著聞集』巻第三所収の話なども踏まえると、その可能性は十分あり得るだろう。当贈答を見る限り、藤代は質の良い墨の産地として既に都の貴族たちに知られていたようで、そのため朝宗は熊野帰りの通清に上等な墨を求めたのである。しかし通清は良い墨を入手していなかったため、「墨良し」と「住吉」の掛詞を核として、弁明の一首を詠み贈った。通清と朝宗はともに住吉社歌合、広田社歌合に出詠しており、親しい間柄だったのであろう。（小林）

返シ 藤朝宗

347 スミヨシトイマハタノマシツノクニノ

ナニハタカヘルトコロナリケリ

【整定本文】 返シ

藤朝宗

スミヨシトイマハタノマジツノクニノナニハタガヘルトコロナリケリ

【現代語訳】 返し

藤原朝宗

（あなたがいた所を）住吉とも墨の良い所とも今は当てにはしますまい。津の国の難波ではないが、（あなたがいたのは「すみよし」とは）名には異なる所だったのですからね。

【他出】『新続古今集』雑下・二〇七三

源通清熊野よりかへりまうでくとききて、よき墨や侍るとたづねけるにあしきよし申したりければ

藤原朝宗

すみよしといまはたのまじ津の国のはたがへる所なりけり

【作者】藤原朝宗。生没年未詳。師尹流宗賢の子。後に朝仲と改名。正五位下太皇太后宮大進。諸資料によると、左兵衛少尉、藏人右衛門尉、檢非違使、内舎人、駿河守などに任じられたらしい。住吉社歌合や広田社歌合に出詠、住吉社歌合では講師も務めた。『千載集』に一首入集。そのほか『月詣集』に二首の詠が残る。《参考文献》中村文『後白河院時代歌人伝の研究』第十七章「平安末期実務官人層の和歌活動」（笠間書院、二〇〇五年）

【語釈】○藤原朝宗 「宗」と翻刻したが、「家」と極めて紛らわしい字体で書写されている。藤原朝宗は【作者】に示した通りだが、「藤原朝家」なる人物は同時代の他資料からは見出せない。『新続古今集』は当歌の作者を「朝家」としているが、「宗」と「家」を読み誤った可能性もあるか。○スミヨシ 贈歌と同じく「住吉／墨良し」の掛詞。○ツノクニノナニハタガヘル 「津の国」は難波がある摂津国、「難波」には住吉があり、初句「住吉」に関連する地名を並べる。「名には違へる」を主文脈としつつ、その裏に「津の国の難波」を響かせる。類例に『元良親王集』『大和物語』にも所収の「人をとくあくた河てふつのくにの名にはたがはぬ物にぞ有りける」（拾遺集・恋五九七七・承香殿中納言）がある。この歌は摂津国の芥川という地名に「飽く」を掛け、相手の移り気を責めている。「名には違はぬ」と詠む点は当歌の「名には違へる」とは逆の発想だが、摂津の地名に言寄せて「つものくにの名には」を用いる詠みぶりは共通する。このほかにも実態と地名との一致、もしくは乖離を詠むものに、「ながれゆくみづさへすめるかがみやまなにはたがはぬところなりけり」（能宣集・四七四「鏡山こゆる人あり、水きよくながれたり」）、「こえくればただちなりけりさくらあとのみぞ高き所なりける」（和泉式部集・六七四「さくら井こゆる日」）などがある。特に能宣の歌は本詠と結句が一致しており、本詠が詠まれる際に念頭にあったか。

【補説】 通清の歌に対する返歌。二句までの内容の理由を三句目以降で説明する構造になっている。「良い墨がな



いのも仕方ないですね。だって、あなたがいたのは、すみよし（墨良し）ではないのですから」と、通清の言い分を受け入れ、納得していることを示している。贈歌返歌ともに「住吉／墨良し」の二重の文脈で仕立てられており、機知に富んだやりとりと言えよう。『言葉集』雑下の巻軸歌であるが、この数首前、343番あたりから言葉遊びを核とした歌が並んでおり、いわゆる俳諧歌をまとめて配列していると思われる。本詠は『題林愚抄』でも俳諧歌として収載されている。なお松野陽一によって、本贈答が石野広通『蹄溪随筆』「藤代墨の事」条に記されていることが指摘されている（346番【作者】《参考文献》参照）。『言葉集』とは詞書にやや異同があるため、参考までに松野論文により引用しておく。無窮会本よりの引用とのこと。

言葉集雑下に、

通清熊野詣より下向したりと聞て、よき墨やあるとたづねけるかへりことに、墨のわるきよし申て、

源 通清

松風の音のみかよふ藤代をすみよしとのみ君かいふなる

かへし

藤 朝家

すみよしと今はたのまし津の国のなにはたかへる所なりけり

石野広通は冷泉為村・為泰に和歌を学んでおり、『為家集』の写本も手にしている（尊経閣本『為家集』識語）。『言葉集』の写本も何らかの契機で目にしたのであろう。（小林）